

Act 3.

Zero seconds experience

- *Everyone knows, anyone not knows.* -

10 龍。麒麟。海馬。そして、海賊旗

エリコがあざけるように、

「ふん、どーしたのよ、あんたら、センチメンタルになってさー。

笑わせるわねー。

未来を見なさいよー、未来をー。ねえ、ANKA」

「いいじゃない、エリコ。そういうときもあるわ、それよりさー」

そういうながら、ANKAは、指さし、

「これ、わたしのよういした馬車を見てくれない？ まー、馬車っていつていーのか、びみょうなんだけどねー」

その言葉にうながされ、停ま^とっている乗りものを見たあたしたちは、あぜんとした。な、なんなの？ こんな^とのあり？

ANKAが説明する。

「むかしの車を参考にしたわ。

1900年代のクラシック・カーをね。

ただ、あの当時の車は、オープンカーに折りたたみ式の幌^{ほろ}がついているような感じものが多かったけど、さすがに、ここじゃ寒いから、しっかり箱^{ハコ}にしたわ。

それと、ほんらいなら、ボンネットがあつてエンジンのおさまる車体のまえの部分を馭^{ぎよ}者席にしたわ。

バルコニーみたいなんで、わたしは、バルコニーってよぶことにしたの」

「あ、あのー、ぜんぜん、わかんないんだけど、どんな車を参考にしたの？」

でも、ほんとにふしぎなのは、そこじゃなかった……

「たとえば、」

ANKAは、いう、

「1910年型チャドウィック Chadwickとか、1909年型ホワイ

トWhiteやロジエLozierやフォードFordやビュイックBuickとか、
1907年型トーマスThomasとか」

きいたこともないなまえの車ばかり。いや、でも、そこじゃなく
つて・・・

「1905年型ピアレスPeerlessとか、それから、1901年型メ
ルセデスMercedesとか・・・参考にしたのよ」

ちつとも、わからんけど、あのー、そうじゃなくって・・・

「フエンダー（車輪の泥よけ）と、サイド・ステップがつながって
いて、はばがかなりひろいでしょう？ 歩けるようになっていて、
デッキとよぶことにしてるわ。

歩く人がおっこちないように、柵もつけてあるでしょ。

フエンダーは車輪に沿って大きく山なりもり上がっているから、
歩いてもいいように、ステップをつけてあるわ」

たしかに、手すりもついていて、船のデッキに見えなくもない。

たしかに、船みたいだ、てゆーか…………

車体が泛ういて……、いや、沈しずんでいる！

どこにつて？ 路みちに！ そう、石だたみに！

車体の4分の1が沈しずんでいる。うまつてるんじゃない、沈しずんでい
る。どういふことなのか、さいしょのうちは、わかんなかった。

よく見ると、石で舗装された路がそこだけ液体みたいになってい
る！ なんじゃ、こりゃー！

ともかく、海に泛うかんでいる船みたいな感じだった。

ほんらいなら、車の影ができるはずの部分の、路みちの石が液体えきたいのよ
うになっている！

車輪じようきせんが蒸気船がいはりんの外輪がいりんみたいに見えた。

液体状えきたいじようになっている路面ろめんを漕こぎ出しそうに見えるし、じつさい、

そうであることがうごき出してからわかった。

けど、さらに、おどろかせるのは、この船みたいな車をひっぱる
いろんな動物だ。

見たこともない生きものだった。

「なんなの、あれ、う、馬じゃないよね、つか、先頭のは……
龍？」

「先頭につながれているのは、翼のある龍だ。」

應龍おうりゅうっていうのさ。

東洋ふうの龍りゅうって、翼つばさがないのが多いんだけど、こういう龍りゅうもいるんだよ」

イースがそう教えてくれたあとに、エリコがまたしゃしゃり出る。

「應龍おうりゅうについては、龍りゅうのなかでも位くらゐが低いものという説もあれば、龍りゅうの最高位さいこうゐだ、っていう説もあるのよ。」

べつの説では、龍りゅうと鷲わしとの混血こんけつ、ともいうし」

ふーん。ときどき、もの識しりになるよな、こいつ。

「そのうしろは、なーに？」

ミーシャがきいた。1匹の應龍おうりゅうのあとには、2匹の（2頭2とうってい
うべきなのかしら？）龍りゅうのような、馬のような、ふしぎな生き物が。

イースが、

「麒麟きりんだ。はじめて見たな。」

動物園とかにいるキリンじゃないよ。伝説上の聖獣せいじゅうさ。

龍りゅうと牛とのハーフだともいわれてる。むかしの中国では、麒麟きりんが
世にあらわれることが瑞兆ずいちょう（幸運のしるし）だとされていた。

そして、そのうしろにいる4頭は、海馬かいばだ」

青黒くぬれたように、つやつやとぬめり光る生き物で、上半身が
馬、下半身が魚だった。その4頭は、まるで鰐いしだたみが海であるかのように、
半身をちやぶちやぶと沈しずめ、ときおり尾びれをはね上げさせている。

ちやうど、この海馬かいばのまわりから馬車（つていえるのか？）の車
体の周辺しゅうへんのところまで、路面ろめんが液体状えきたいじょうになっていた……

「さいしよは、ふつうに龍馬りゅうばにしようかとおもっていたんだけどね、
それじゃおもしろくないんで」

「龍馬？」

龍馬りゅうばというのは、たてがみが流旗りゅうきのように長くて、ふつうのサラ
ブレッドよりもひとまわり大きく、飛ぶように何千キロも走りつづ

けることができるすごい馬のことだと、イースが教えてくれた。

車体には、海賊旗ジョリーロジャー (Jolly Roger) がかけられている。

A N K Aが満足げにいった。

「お遊びよ。」

名づけてジョリー。

ぜんたいに航海こうかいをイメージしているの。海馬かいばと車のまわりを液状えきじょう化かさせて、海をわたるみたいに漕こいですすめるよう、設定してもらったのよ。

先頭の應龍おうりゅうは、独立して活動できるから、偵察ていさつなんかにもつかえるし、いざとなれば、空からの攻撃も可能なのよ。まあ、切り離はなせば、麒麟きりんも、海馬かいばも、みんな個別に活動できるんだけど」

イースがきく、

「でも、この動物たちを操作そうさする馭者ぎよしやが必要じゃないか？」

A N K Aが笑って、

「なんのためにアバターをつくったとおもうの？」

見て、ジャジュよ」

どこからともなく1人のかしこそうな褐色かつしよくの髪かみの少年があらわれて、バルコニーぎよしやせき（馭者席）に坐り、手綱たづなをにぎる。

「彼が龍りゅうをあやつって、聖なる獣けものたちを統率とうそつするわ」

眼がきらきらしてる。あたし、おもわず、

「へー、イケメンじゃん」

エリコがまたまたしやしり出て、

「あーら、わたしのエチカも見てよ」

すると、金髪で日焼けした、碧あおい眼めの、背の高い筋骨隆々きんこつりゅうりゅうの少年があらわれる。剣こしを腰はに佩はいていて、革かわの鎧よろいの上にマントをはおっていた。

あたし、

「ふんいき、グラディエーターけんとうし（古代ローマの剣闘士）っぽいねー」

「そーよ、そーゆるコンセプトだもん。」

つつーけどさー、あんた、グラディエーターってネーミングの由ゆ

来、知ってんの？

古代ローマのコロシウム（円戯場）なんかで闘う剣闘士たちがローマ軍団の武器だったグラディウスって剣をつかったから、そおよばれてんだよ。

ちなみに、グラディウスは刃わたり70センチくらいの両刃の剣で、さがするどくとんがってる、とか知ってんの？」

「知らん。きょうみもない」

ほんととは、そうでもなかったんだけど。意外に歴史好きなあたし。

ミーシャもさわぎ出し、

「えー。わたしのユくんも見てー」

すごい細身で、美少年なんだけど、ぜんぜん役立ちそうもない、繊細そうな緑の瞳、白皙のきめこまやかな肌、マスカラつけて金いろの長い髪をした、ビジュアル系の少年が出て来た。まちっすか？

ぢや、イースは？

「迦楼羅っていうんだ。

なんでもこなせる器用なやつさ。寡黙だしね。

つきあいやすいよ」

おだやかそうだけど、眼がするどくて、表情のない、やせて冷たそうな感じの少年だった。

つきあいやすいって、そりやあ、イースだけだお……

「ユリイカのは、どおよ？」

あんのじよう、エリコがきいてきた。

「あたしのは、彼よ」

あたし、非録斗を指さした。

白っぽいさらさらした髪に、うすい蒼い双眸、チュニツクとズボン、頬あてのように、青い龍の刺青が頬に彫ってあって、眼の下に5ポイントのサイズで繊細な梵字のタトゥーを入れている。金泥いろで。

その梵字を七宝（金、銀、瑪瑙、赤珠、瑠璃、玻璃、蝦蛄）の宝石に由来するらしい。金・銀・瑪瑙以外は、どおゆーもんだか、

昨日まで知んなかった：ハハハ）を鏤^{ちりば}めて飾ってみた。

どこか翳^{かげ}のある少年ふうにしあげて、なんか、いーじゃん。って
自画自讃だお。

コウキくんなんざ、眼じゃねーぜー、って、まだ依存^{いぞんねんちやく}粘着^{ねんちやく}してる
じぶん、情けなくね？

「なんかさ、暗くねーか？」

ケチつけんじゃねーよ、エリコ。

で、あたしは、もちろん、シカト。

「さあ、さあ」

ANKAがみんなをうながし、

「まだ説明したいことがあるから、荷物をうしろのトランクにつん
で。そして、なかに入って」

車体のうしろにまわった。

後部に大きな革^{かわ}製のトランク・ケースが固定されており、荷物を
入れる。最後にイースが荷物を入れた。

「あれ？」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない……」

イースは、トランク・ケースをしめた。

「あ、見て、きれいな。金いろぴかぴかのランプがつるしてあるー。

すごいよー」

見上げてミーシャがいう。イースも気をとりなおしたようにうな
ずき、

「美しいね。漆^{うるし}塗りみたいにつやがある」

ANKAがステップに片足をのせながら、ふりむいて、

「あ、そう、そう、軽^{けい}量^{りょう}自家発電機^{ようじかはつでんき}があつて、パソコン使用可だか
ら」

あたし、おどろいた。

「ネットつながるの？」

「ここをどこだとおもってる？」

あ、そうそう、ユリイカ、冷暖房れいだんぼうつきだからさ、携帯用カイロもトランクにしまつていいよ」

門の外では、たくさんの人たちが出立しゅったつしようとしていた。

すでに隊列たいれつをととのえて、道を下っていく人たちもいる。たぶん、もう見えないくらい、とおくへいつている人たちもいるんだろう。

まだアカデミアのなかで寝ぼけまなこのまま、旅したくさえ終えてない人たちもいるんだろうし……なんて考えてみる。

留年りゅうねん（いや、学年じゃないから、留年りゅうねんとはいわないよな？）して、アカデミアにまだ数日（数週間か？）のこる者だっているだろうし、あたしたちよりあとに來た人たちは、ふつーに寮りょうで、まだ寝ているだろうし……。

「ねー、あれ見て、ジンよ」

ミーシャがいう。

あたしは、ミーシャの指さしたほうを見た。

ほんとだ。

あたし、ANKAをふり返り、

「彼女、どこに就職しゅうしょくすんのかな」

「あら、わたしたちと同じよ。レオン・ドラゴ。

精銳部隊せいえいぶたいの指揮官しきかんだつてきたわ」

「ANKA、そーゆーことわ、はやく教えてよー、あたしたち、いっしょなわけ？」

「べつにこまらないでしょ？　なんではやく教えてほしかったのよ？」

「もー」

ジンたちは、例の5人組で、あたしたちの右50メートルくらいのところにいた。

みんな、さまざまな彫りもので飾かざられた鞄さや、大剣を佩はいて、旅用たびようのかかるい装甲そうこうをしている。

あたしもこの3週間あまりのあいだに、彼女たちのなまえと顔をおぼえた。

褐色^{かっしょく}の肌、いつも鋼^{はがね}の装甲^{そうこう}を脱^ぬがない、長身^{ちやうしん}で長く黒い髪がスト
レート^{スト}のアンジェラ。

色白^{いろしろ}で青く深いまなざしに、血いろの唇をした、気味わるい微笑^{ほほえ}
みのメアリー（Bloody Mary）。

髪^{かみ}を突き立ててクサリのネックレス、やせ細^{ほそ}ったからだに革^{かわ}ジャ
ン、瞳孔^{どうこう}が紅^{あか}いイヴィラ・ヴィシヤス。

青白^{あおしろ}い顔に、いつも半ばとじたような眼つきで、どこを見ている
かわからない魔女のようなエピタフィラ。

背の高い5人の女の子軍団は、大きな鳥に乗っていた。太くて長
い2本の脚^{あし}で歩くが、ダチョウではない。

つか、恐竜^{きょうりゅう}っぽい。

トゲのついた長い尻尾^{しっぽ}あるし。翼^{つばさ}には、とがった5本の爪^{つめ}がつい
ている。

馬のようにいなくなきながら、その翼^{つばさ}をひろげると、右のはしから
左のはしまで、5メートルくらいあった。飛べそうだ。あたし、お
もわず、

「なんだお、あれ。見たことないよ、鳥？」

エリコが、

「たぶん、オリジナルじゃない？ だいたい、神話・伝説やファン
タジーを参考^{さんこう}につくるもんだけど、どこからもイメージを借^かりない
で、じぶんたちのアイデアだけでつくるやつもいるからねー。そ
おゆうんじゃない？」

そーいわれて、あたしは、ちと感心した。

「へえー、こったことするんだねー。」

んーなアプリがあるんだあ」

そして、ジンたちのかたわらには、龍馬^{りゅうま}に乗った重装騎兵^{じゆうそうきへい}が10人
ついていた。騎兵^{きへい}全員が鉄^{てつ}の鎧^{よろい}で全身をおおっていかついけど、女
かもしれない。従者^{じゆうしや}も全員、女の子だけにするとかって、彼女たち
なら、やりそうな気がするし。まあ、からだつき見ると、男まちが
いなしだけど……

こっちに気がついていいのか、気づいてないのか。見むきもしない。ムシ！って感じだった。

「やあ、出発かい、ANKA」

あたしたち、いつせいに、声のほうをふりむく。

「あ、ヨセフ？」

まるで知りあいであるかのように、あたしがこたえてしまった。

なんとなく気まずくて、あたし、ANKAのほうを見る。

ANKAは、気にとめてなくて、ふつうにヨセフのほうを見ている。ホッ。

彼は、バイクに乗っていた。

馬の鞍くらみたいな革製かわせいのシートで、ボディ全体が戦闘用に装甲そうこうされている。フロント・フォークが長くて、前輪ぜんりんがかなりまえのほうにあった。

ハンドルは山羊やぎの角つみたいに大げさに湾曲わんきょくしている。

車高がすごく低くて地を擦するような感じだ。燃料タンクは筋肉のようにもり上がっていた。

エンジンから出たエグゾースト・マニホールドが流線りゅうせんをえがきながら美しくからみあい、太い排気音はいきおんをとどろかせている。

座席ざせきの後部に荷物が山づみになっていて、ちようにいい背もたれになっている。

見かけによらずワイルドなのね☆ ANKAがかるく微笑ほほえんのかという、

「シルヴィエの戦略顧問せんりやくこもんになったってね」

「ああ。だが、モスコクール駐在軍勤務ちゆうざいぐんきんむさ」

「モスコクール？」

「ああ。ユヴィンゴ王国しゅとの首都だ。

帝国の傀儡政權かいらいせいけん（他国にあやつられ、実権をもたない政權）がある国さ。

神聖シルヴィエ帝国に完全にあやつられていることは、国民のどれもが知っている。だが、どうにもならない。

圧倒的な軍事力の差があるからな」

「けど、レジスタンスがいるってきいてるわ。

いつまでも傀儡政権のままではいないでしょう。

じつさい、隣国のクアバでは、革命家のフアルコが軍事政権をたおして革命に成功してるわ。

民衆に支持される正義が勝つのがIEの鉄則のはずよ。

負けたドミゴ政権の中枢にいた者たちは、しばらくIEには、
ENTERできなくなっているはずよ」

「クアバの件をいうなら、革命政権の命運は時間の問題さ、といっておこう。

いまだに剣や弓、せいぜい、大砲をつかって戦争するぐらいがやつの彼らが、自動照準装置のついた砲台を持つ装甲戦車や、5キロメートルの飛距離を持つミサイルや、雲の上を飛翔する戦闘機に敵うとおもうかい」

「ふしぎね。

IEで兵器が発達しなかったのは、それなりの理由があるのよ。知識がなかったわけじゃないくらいわかるでしょ。

ここにいる人間は、だれでも現代兵器のことを知っている。パソコンやケータイをつかって、ここまで来るんだから、とうぜんでしょう。

知ってはいても、だれも開発しなかった。

大量殺戮兵器など開発したら、この世界では、不利になるからよ。

ここでは、勝つために、最も必須のアイテムは『正義』だったわ。

ただ現実的に勝てばいいのだという、なりふりかまわない考えでは、クドクが減じて、むしろ、命とりだった。

シルヴィエとほかの国とで、科学の発達のレベルに差があるのは、とうぜんよね。

どこの国も、そんなことをしようとは、夢にもおもわなかったからよ。

なぜシルヴィエのような国が世界の覇権をねらえる超大国に成長

できたのか、意味がわかんないわ」

「さあね。」

どっちにしろ、贅沢ぜいたくになれた坊ちゃん育ちの、高貴こうきな生まれの僕には、きょうみがないな。

ただ最もすすんだもの、最もすぐれたもの、最も高度で強く美しく、新しいものに関心があるだけだ」

「ふうーん。」

勝ち組のところに行ったってつまないんじゃないかなー」

「そうでもないさ。」

進化することが人類の命題めいだいだから。よりすすんだもの、すぐれたもの、高度で強く美しいものにこそ惹かれて、とうぜんさ。

じゃあ、急ぐから、これでお別れだ。

さあ、出発しよう」

彼は、もう1台のバイクと装甲車そうこうしゃとに分乗ぶんじようしているなかま4人に声をかけると、エグゾースト・ノートをひびかせ、タイヤをスピンさせながら車体をまわし、立ち去る。

装甲車そうこうしゃは大きな径けいのタイヤがボディの四隅よすみギリギリに着いていて、車高が高く、人の乗る箱の部分は平べったくて、まよこから見ると、腹のへこんだ獐猛どうもうな獣みたいだった。

「さあ、わたしたちもいこうか」

沈黙ちんもくのあと、ANKAは、微笑ほほえんでいった。けど、眼がちよーきびしー。

んで、ジンたちも、いつのまにかいなくなっていた。あたしたちも旅立たなくっちゃ!!

ジョリーに乗ると、良さがすぐにわかった。

走行路そうこうろを液状えきじようにしてしまうから、地面の凹凸おうとつが乗り心地にまったく影響しない。海みたいな波があるわけでもないし、ラクで気持ちよい。

ジャジュがバルコニーで應龍おうりゆうを中心に麒麟きりんや海馬かいばをあやつった。

海馬かいばは、海面をゆくクジラカイルカのように、上下にうねりなが

ら黒いからだを黒光りさせてすすむ。

麒麟きりんは、かろらかに地を蹴る。

應龍おうりゅうは、すいすいと泳ぐ蛇のように、宙に泛ういてすすむ。

迦楼羅かるらがジャジュのとなりに坐る。

そのわきに、見はりのようにイースが剣を突いて立った。

あたしの非録斗ひろとは、エリコのエチカといっしょに、ジョリーの後背部を見はるために、トランク・ケースのおかれている後部デッキにいる。

んー、冒険ぼうけんにいくふんいき満載まんさいだあー。おー。

あれ？ 彼女は、どこ？

ANKAは、カーテンでしきった奥の小書斎しょうしょさい（ほんと小さいよ。だって、このジョリーのなかにあんだもん）で、なにか研究中だった。

ちなみに、エリコとミーシャとは、いま、ラグジュアリーな休憩きゅうけい室しつにいる。

そこは、繻子しゆすのクッションのある、本革ばりのソファシート、木目の美しいマホガニー、真鍮製しんちゆうせいのランプに照らされ、シルクのカーテン、小さなタペストリー、壁龕へきがんふうの棚たながあつて、コーヒーカップとか、クリスタルグラスとかがおさまってる。

んー、リラックスできそう。

安らぐには最高かも知んない。

けど、休憩タイムの意味わかってんのかよ、ミーシャ、キッチンでなにかはじめてる。そう、台所つきなんだよね。

しかも、シャワーも水洗トイレもある！ これで冒険、つていえるかって感じなんだけどお。まあ、ラクだし。（笑）

繊細せんさいというか、たよりない感じのユユは、ミーシャのそばで彼女の作業を手つだっている？ ようだった。

はあー。

で、あたしは、なにしているかってゆーと、あたしたちのまわりを映し出しているディスプレイをにらみ、周囲しゅういの状況を監視かんししてい

る。

あたしがいるのは、操縦席コックピットとよばれるスペースで、位置情報いちじょうほうをもとに、ジョリーの周囲しゅういに敵がいなかったか監視かんしする場所ばしょなんだけど、ジョリーの操縦そうじゆうはバルコニーの人がするので、コックピットっていうなまえが的確てきかくかというところでもない。

きっと、もともとのコンセプトは、周囲しゅういの情報をもとに、進路しんろや速度を決定する司令塔しれいとう的な役割やくわりをする場所ばしょだったんだらうなっておもう。

ただ、あたしとかに、その能力がないから、いまは、ただ、周囲しゅういの状況を監視かんしするだけにとどまっている……みたい。

けど、これで敵を見おとしたら、あたしの責任？ でもさー、そんな危険あるのかなー？ ムダな仕事してる気がするなー。

ちなみに、この映像はナビゲーションもかねていた。

だから、もし道をまちがえそうになったら、右にいつてとか、左だよとか、あたしがいわなくちゃいけない。

あたしたちは、コックピットや小書斎や休憩室やキッチンやシャワーやトイレや倉庫など、ジョリーの居住スペース全体をキャビンとよんだ。船の客室キャビンにたとえたってこと。

気候きこうは荒れて、吹雪ふぶきだった。

まるで、あたしたちがイデア山を下りるのがゆるせないみたい。来たときとは逆に、絶壁ぜつぺきのミゾみたな道を下りていく。あいかわらず暗い。あたし、ぼうつとした、空想的な気分になって、独りの世界に入っていた。

だいたい、乗りものに乗るとものおもいにふけてしまうことが多い。

しかも、監視画面かんしがめんを見ても、なあんにもないしー。
はあ。

あたし、通学でバスに乗ったときをおもい出した。
山を下り終わると、じかに吹雪ふぶきにさらされる。いくさきもよく見えない。

さっきまで、あたしたちのまえにいた馬車も、見えなくなっていた。いきさきがそれぞれにちがうから、あたりまえなだけ……ここからさきは、来たときとは、ちがう道をいくことになる。いよいよなんだ、とリアルにおもった。

「あれ？」

どこからだろ、はげしく鐘^{かね}が鳴っているのがきこえた気がした。いや、きこえる。吹雪^{ふぶき}のせいできこえにくいけど、きこえている。もちろん、アカデミアにちがいない。ほかにない。

ディスプレイを見る。

「え？」

重装甲^{じゅうそうきこう}の騎士たちがせまって来ていた。

「ANKA、たいへん。これ、なに？」

エリコとミーシャがあたしのほうをむく。カーテンをめくって、ANKAが出て来た。

「どうしたのよ」

「見て」

外で鐘^{かね}の音をきいたイスも入ってきて、

「どうしたんだろう。きこえるかい？ いったい、あの鐘^{かね}の音は」

ANKAが顔をしかめ、

「なんだろう。アカデミアの最強戦闘士、重装機甲騎兵^{じゅうそうきこうきへい}だ。

まるで、なにかを追っているかのように疾駆^{しっく}している」

そのときだ。

底ひびきする大声がとどろく。

「待て、そのふらち者、待つんだ。

待たんと、悲鳴^{ひめい}を上げるひまもなく、殺すぞ！」

5人とも顔を見あわせた。エリコがヒステリーぎみに、

「どういうこと？ ふらちって、わたしたちのことをいつてるの？」

イスが冷静^{れいせい}にいう、

「ともかく停めよう。ぼくらに、なにもあやまちはないはずだ」

ANKAもうなずき、

「そうだね。きっと、なにか誤解だ。わたしが出るよ」

「ぼくもいく」

停めた。

あたしたちは、窓から外を見る。

ANKAとイースが外を歩く。

非情な鋼鉄製の装甲を身にとって、大きな楯に腕をおし、ま

っ黒な長い槍を、あたしたちにむかって突き立てている、からだの

大きい12騎の騎兵隊。

息が湯気になり、けわしい形相でこっちをにらんでいるのが、鉄

の兜や頬あてごしにもわかる。

なんでよー？ こわいよー。

ANKAがたずねる、

「いったい、どうしたんですか。なぜ、わたしたちをよび止めたのですか？」

1騎がすすみでる。

「どうぜんだ。しらばつくれるな、ふらち者！」

さあ、返すんだ」

イースが問う、

「なにをでしようか？」

大音声をひびきわたらせ、

「決まっておろうが！」

きさまらが文書館から盗んで持ち出した『kOO』だ！」

ええーっ！ そんなばかな！ ひどいぬれぎぬだわ！

ANKAは、さらに1歩すすみ、

「わたしたちは、そんなことはしていません」

「いや、少し、待つ……」

イースがそういいかけたとき、重装甲騎兵たちがいつせいに大剣を鞘からぬいて、斬りかかってきた。あたし、ジョリーを飛び出した。

「うわあ！」

ANKAがころがつてよける。眼に止まらぬはやさでイースが攻撃をかわしながら、大剣をぬく。

剣の長さは彼女の背丈を超え、刀身のはばのいちばんひろいところが彼女の腰のはばくらいなのに、すばやくぬく神技。

イースは、剣の平たい腹のところでたたき、6、7人の甲冑を破損させた。

ふつうの兵士なら、これで昏倒したにちがいない……

強靱な兵たちは、すぐに起き上がった。

「しかたない」

そういうと、こんどは、刃をむけてぶあつい鉄鋼の鎧ごと腕や脚に深手を負わせはじめる。

かるやかに重力を無視して、地に足をつけることなく、枝から枝へ飛ぶ鳥のように、つぎつぎ斬り裂く。アカデミア最強の精鋭である重装機甲騎兵がなすすべもなく、止まっているかのように見えた。いったい、イースよりも強い人間っているんだろうか。

でも、あのメタルハートに殺されたことがあるっていったけど……

重装機甲騎兵たちは、たおれて意識を失い、うごけなくなる。

「力が入りすぎたな。手ごわい相手だったから、かげんができなかった。」

しゃべることが出来るやつをのこしておきたかったが」

そういいながらも、イースは、平静だった。

ようやく立ち上がったANKAは、

「なぜだ。」

説明をきこうとしなかった。あきらかにおかしい」

エリコとミーシャも出て来る。

「どうということなのよ！」

エリコは、ヒステリーぎみだった。

「わからない……」

ANKAがつぶやくようにこたえたとき、イースが、

「いや、わからなくもないかもしれない。

これを見てくれ」

トランク・ケースをあけた。

ジョリーの後部、あたしたちの荷物の入った皮革ひかくケースだ。

「ぼくが荷物を入れるとき、この箱をふしぎにおもったんだ」

イースがとり出したのは、桐きりの箱だった。毛筆もうひつの箱書きはこががある。

いつのまに!? ふしぎにおもってとうぜんだ。あたしたちのうちにこんな箱をつかう人は、だれもない。

「そうだとおもった。あけてみよう」

あけた。なかにあったもの、それは、皮革装丁本ひかくそうていぼんの『k O O』だった! ありえねーっ!

「なんでよ、なんで、これがここにあるの? ありえないでしょっ! これ、ちょーやばいよっ!」

エリコがさけぶ。

さすがのANKAも愕然がくぜんとしてる。

「わたしが荷物入れたときにはなかったわ。どうして……」

ANKAがいった。

「わたしもよーっ!」

すかさずエリコがいう。ミーシャもいった。あたしだって同じく見ていない。

イースがいった、

「では、見たのは、ぼくだけなんだ」

あたし、青ざめた。だって……

「でもさ……、文書館で最後にさわったの、あたしだね?」

エリコがいきなりあたしをにらみ、

「あんた、なにをしたの?」

「ざけんなよ、あたしじゃないよ」

イースがあいだに入り、

「わかってる。」

ユリイカじゃありえない」

A N K A もうなずき、

「そうよ。しんばいいないわ、ユリイカ、わたしたち、信じあわなくちゃ。」

だれかが荷物を入れるときそばにいなかった？」

「だれもわたしたちのあいだに入りこまなかったよー」

ミーシャがいったので、あたしも、

「たしかにそーだよ、あたしも知ってる……」

って、あたしもいった。A N K A も眉根まゆねを寄せ、

「たしかに理不りふ尽じんだ。」

こんなことができるのは」

「運営アドミニストレーターサイドよ、管理者 (Administrator) ー」

エリコが声を上げた。

「いや、管理者は、人じゃなくて、プログラムで動く中枢ちゅうすうシステムだ。」

こんかいのことはどう考えても人為的だ。バーチャル・システムのプログラムをいじったのであれば、運営者（作者とそのなかま）だろう」

イースがそういい、「いずれにせよ、シーレオーノ行で、きみたちにつきまとったバリユースの行動も、ウィルス・チェック以外の意味におもえてくる」

A N K A、

「でも、なんで……」

あたし、

「ってか、これから、どーしたらいいの、それ考えよー」

エリコ、

「そーだよ、ユリイカのいうとおりだよ。」

『現実以外の真実はない。そしてつねに選せん択たくをせまる。（聖者イサの

伝記…クレモントス・グレゴルゴン著）』ってゆーじゃん」

イースが反論し、

「いや、どうしてこうなったかもわからずに、つぎになにをするか

は、決められないよ」

ANKAがうなずく、

「そうだね。これが、いったい、なにを意味するのか……」

ミーシャがいった、

「返さなくていいの？」

ANKAは、はっとした。しかし、また考えこみ、

「ミーシャのいつていることが、いちばんシンプルで強い正論だわ。

でも、わたしたちは、なんの弁明べんめいもゆるされず、処刑しよけいされる」

イースが、

「どうしてこうなったかわからず、考えるいとまもない……

ANKA、こういうばあい、ストレートな正論せいろんでいくべきだよ。

クレームを出すんだ」

「そうよ！」 エリコが急に活気かつきづく。「そうすべきだわ。わたしも、ずっとおもっていたのよ。」

でも、どこへいったらいいの。いったん、ログアウトするとかわないだよ」

イースが冷静れいせいに、

「むろん、アドミニストレーション 管理局 (Administration) だ。

各大陸に、いくつか設置されている。

それが敵だとしても、まずは、そこへいくしかない」

ANKAは、もうケータイで検索けんさくしていた。そして、いう、

「とおくない。

アカデミアの領域内りょういきないにあるわ。いってみるべきね」

あたしもなんか興奮きんぷんしてきて、

「よし！ いこうよ。」

あたしたち、わるくないんだっていおうよ」

さあ、出発よ、ってふんいきになったところで、エリコが、

「ちょっと待って」

といって、意識を失つて重装機甲騎兵じゅうそうきこうきへいのふところから、つぎつぎケータイをとり出し、ふんで粉碎ふんさいする。

「これでアカデミアへの連絡がおくれるわ。ねー、あんたたち、もつとさー、したたかになるーよ」

そーゆーところ、ほんと、しっかりしてるよなー。

管理局の位置をナビで確認し、出発した。

吹雪はあいかわらずだ。ディスプレイを見ながら、

「右の道をいって」

あたしは、ケータイで外にいるイースとジャジュにつたえる。

「あやしい影は見えないか」

イースがそうたずねた。

「ないよ、だいじょーぶ…….のようにおもわれる…….みたい」

いわれると、よけいに緊張する。あたしたちには、リアルに危険があるんだ…….

ホンキで気をつけなくちゃいけない。いつまたつぎの追手が来るか、わからない。

「アカデミアの追手が来るまで、かなり時間があるはずよ。

おちついてよ、ユリイカ」

ANKAは、そーゆーけど…….

アカデミアをとく離れても、草木のない、岩ばかりの山岳がつづいていた。

左右をけわしい山にはさまれてる。岩が迫ってくるようなせまい道だ。

ジャジュも應龍も麒麟も海馬も降りつもる雪で白くなっている。それでも、イースは、微動だにしない。迦楼羅もだ。どんな気持ちなんだろうか、こんな状況で寒さのきびしい外にいるのって。

「吹雪ひどいね」

そういいながら、ANKAがあたしのわきに来て坐り、

「敵のことは、ともかく、少なくとも道はずれていないか、しっかり位置確認してて」

「はずれようにも、ほかに道ないじゃん。て、わかったよ、だいじょうぶだよ」

といいつつ、ほんとな、と自問自答。じもんじとう

そろそろ、交替こうたいなんだけど、ミーシャにこの仕事できるのかなー。
っておもつてると、おいしそうなおいが。あれ？

「おやつ、できたよー」

昼飯もまだなんですけど？ まぢ、こいつ、やれんのか？

あたしは、ホットケーキをムシヤムシヤしながら、デイスプレイ
見る。

「ユリイカ、食べるのに夢中になりすぎて、監視かんしをおこたらないで
ね。こんな場所で襲おそわれたらたまらないから。

とくに、上から攻撃されたらね」

あたし、おもわず窓から切り立つ左右の岩壁を見上げた。た、た
しかに：：：：：

ANKAが笑う、

「さあ、画面になにも映ってなきや、心配いらないんだから。青い
顔しないで」

でも、じつは、気になっているものがあつた。

「ねえ、見て、ANKA、これ。

毛皮で着ぶくれした人たちが雪の穴から出入りしてるみたい。

ほら。

で、この人は、岩の上に登ってる」

「山賊さんぞくね。

こんなのは、放置しておこうよ。来たら撃退げきたいするまで」

ハイマツか、低い灌木かんぼくが目立ちはじめてきた。

さらに下ると、ダケカンバ（岳樺）らしきものが雪になかばおお
われて立っている。木が増えてくると、なんとなく安心する？

あ、シラカンバ（白樺）だとおもった瞬間、まわりは森だった。

トウヒ（唐檜）とか、樹皮じゅひが暗褐あんかつで鱗状うろこじょうのカラマツ（唐松）、ト

ドマツ（椴松）、黒褐こっかつでなめらかなやあわいいろのエゾマツ（蝦

夷松）とかの針葉樹しんようじゆにかこまれている。

でも、道はまだまだ下り坂だった。

イースが雪をはらいおとしながら、入ってきた。

「ふう、ここえたよ。ひどいもんだ。ふうつ。

そろそろ、休憩きゅうけいにしないか。ホットケーキじゃ、おなかもあたたまらないし」

あたしたちは、ジョリーを停とめて昼食にすることにした。

とりにく鶏肉スープがあたたまるまで、ミルクたっぷりのコーヒーを飲だんしょうんで談笑。

ANKAとジャジュとが外で、ジョリーの前後に立って見はりをしている。

あたしも、いちおう、ディスプレイをよこ眼で見てる。いじょう異常なし、と。ん、あれ？

小さなディスプレイのひとつに、なんかバリユースに似た人が見えたような気がした。森のなか、雪に吹かれて立って……でも、そんなことって……。

それは、すぐに見えなくなった。消えていた。やっぱ、錯覚さつかくか。おびえすぎてンのかなー。

食べ終わると、ANKAたちと交替して、あたしと非録斗ひろとが外に立つことに……

外に出たとたん、ぴゅーっ！ さぶっ！ きゃあつ、イースとか、よくいられたわ、まち。

アカデミアの古着屋で買った極寒地仕様の軍用コート着たけど、たまんない。眼もよくあけられないし。

非録斗ひろとは、あたしを見た。

「だいじょうぶかい、ユリイカ」

きゃー、やさしいのね。じぶんのつくったじぶんのためのアバターって、最高。

あたしは、ANKAから借りた剣を持って立つ。はやくどこかで剣を買わなくっちゃ！ どんなのがいいかなあ？ やっぱ、かわゆいやつ？ あー、寒い。

30分くらいがんばって、ANKAから、

「さあ、出発しよう。ユリイカは、ミーシャと交替こうたいだから、乗って休んで」

たすかったあ。

デッキに上がって、コックピットに入る。そこから、休憩室きゅうけいしつへいくために仕切りの幕まく（緞帳どんちやう？　これ1枚あると、温度がちがう）をひく。室内で、エリコがケータイをいじっている。

「もー、寝すぎちゃってさー、眠くないんだよー」

んなこと、きいてねーだろ。第一なー、だれも休憩中きゅうけいちゆうは寝なくっちゃいけないって、いってないし。

あたしは、なにもこたえず、なかに入る。

後部座席には、やわらかくてプリーツの入った白い革かわ張りソファ。四角いクッションがたくさんおかれている。繻子しゆすばりで4つのすみに房飾ふさかざりがついていた。

窓の外を見ると、森の樹木のなかに、モミやシラビソの木がまぎって、鬱蒼うつそうとした感じになっている。

あたし、よこたわった。

「疲れたから、こっちは寝るよ」

「かってにどうぞ。じゃましないから」

ほんとに眠い：：朝から緊張してたし。おなか、いっぱいだし。すぐ眠りにおちた。夢を見ていたとおもう。どういう夢かおぼえてないけど、夢を見ていた。まあ、ここでのことも夢みたいなものだけ。

眼をあけてみた。眼が覚める。

眼が覚めても、なんにもわかんない。なんにもわかんないでいることに気がつき、つぎに暗いことに気がつき、ジョリーのなかにいるじぶん_にに気がついた。気がつくのに、数秒かかっていたことも気がつく。

リアルがよみがえり、現実のストーリーにつながった。

あたしは、ユリイカ。ここは、IE。そうか。

：：ああ、ほんとに、そーなんだ。

さいしよに、そうおもった。

なにをどうおもったかは、言葉でうまく説明できない。すべては、
ころ、想い、感覚、意識でしかない？つーことかな？

暗さが深くなっている。たぶん、夕方……雪降りだから、はつき
りしないけど、暗さがちがう。

からだがだるくて重い。

エリコは、すでにいなくて、ミーシャがスヤスヤ。

でも、ここは、なれ親しんだ寮じやない。アカデミアのことをお
もい出す。

タカフシ先生、まぢ意味不で、変わった人だった。

なんか、笑みがこぼれる……ふふ。

急に、ジョリーが止まった。

ジャングルの怪鳥のような甲高いさけび？

もしかして、應龍？

それにつづく低いななきと唸り。それが海馬だとすれば、戦い
を告げるラッパのような鳴き声は、麒麟？

なに？ なにごと？

ぶあつい緞帳をひいて、あたし、エリコにきく、

「ねえ、どうしたのよっ？」

「わかんないねーよ、イースが止まれって」

あたしは、窓の外に目を凝らした。

吹雪のなか、夕闇の暗さにもった雪がぼんやり泛かんでいる。

ぶあつい防寒着すがたの9人の男がかすかに見えていた。こちら
にむかって来る、ゆっくり歩きながら。

雪をふむ足音が風や應龍や麒麟や海馬の鳴き声のあいまにきこ
えていた。

「エリコ、あんた、監視していて気がつかなかったの？」

「失礼ね！ こんなやつら、映ってなかったよ」

ANKAが入ってきていう、

「山賊だよ。」

たぶん、旅人が来るのを、じっと待ちぶせしていたんだろう。かくれていたのだから、気がつかなかったのもムリない。

ともかく、イースと男の子たちにまかせよう」

イースと迦楼羅^{かるら}は、すでにバルコニー^{ぎよしやせき}（馭者席）から降りていた。

ANKAが窓から顔を出し、うしろにむかつてさげぶ、

「エチカ、非録斗^{ひろと}、持ち場をはなれないで、そっちは、たのんだよ」

男たちのうち1人が首をのばしてこちらを見る。

「へー、ガキばかりみてえーだな。

おとなしく銭^{ぜに}や食いものをよこしな。へへ」

「クドクがなくなる。

やめておけ」

イースは、まったくへいぜんとした顔で、そういい放^{はな}った。

もう1人が顔をしかめ、

「へっ。クドクだ？ そんなものがなんの役に立つ？」

「ばかな。

ここは、IEだ。そんなことも知らないのか」

背の高いやせた男が笑い出す。

「とバカが申^{もう}しております。ひやはあ、あひやひやひや。お疲れー。

この世にあるのは、ただ俺^{おれ}がいて、俺が剣をにぎってる、つてい

う現実だけさね。それ以上でも、それ以下でもないわ」

イースが冷厳^{れいげん}にいう、

「やはりそうか。

そのように感じつづけてはいたが……

ふ。

きさまらは、すでに人間ではない。きさまらになんのえんりよも

するひつようがないわけだ」

「ぬあわあぬいーい？ くわっ、ほざくなや。

いっくでえ、やろーども」

3人の男がイースに、それ以外の3人が迦楼羅^{かるら}に、鞘^{さや}から剣をぬ

いて襲^{おそ}いかかる。

のこりの3人がこっちにむかってくる。そのうち1人は、應龍おうりゅうの爪つめにとらえられて、ひき裂さかれた。あと2人がせまって来る。

「あー、あー、あつあつ、来るよ、なんとかしなさいよ」

エリコが声を上げると同時に、ANKAがレイピア（刺剣）をぬく。

イスにむかった3人の山賊さんぞくは、ほとんど同時に斃たおれた。首がおちた者、あたまからたてに裂さかれて、からだがふたつになった者、タスキ掛けがに斬きられた者、悲惨あわれ。

イスは、大剣を眼に見えないはやさでたくみに縦横じゅうおうにひるがえした。

迦楼羅かるらも1人を斃たおすが、2人相手に苦戦くせん。

イスが迦楼羅かるらの助太刀すけだちに入る。

ANKAが外へ降りた。1人の山賊さんぞくがつぎつぎとふり下す剣をたくみによける。またよける。よけながら、突きのチャンスをねらっている。

もう1人がデッキに上がってきた。背の高いやせた男だ。扉をあけて入って来る。

「おお、ほお、あつたけーや。外とは大ちがいだあ、ひやひや。

ぬへへへ、お嬢さんがたばかりじゃくん。ほによお。ひやひやひや、でっへっへっへ」

エリコがぶちギレてさけぶ、

「なんなのよ、あんた！

ルール違反いはんだわ。大人の男のくせに女の子に暴力ふるうの、最低だわ。

あたまおかしいんじゃないのっ、出ていけよっ」

ほんとだよ。バカな男。そんなことしても損そんするだけだよ。

こんなムナシイことしてなんのかいがあるの……

「うぜーや、ブサイクが」

「な、なんですってー、ちよーム力つくつ、だれが不細工ぶさいくよー」

「へっ、いいから、殺されたくないや、銭ぜにと食いもんよこせや。

おらあ、この剣が見えねーか。この現実をどーにもできねーだろーが。

これで、なん人もぶち殺して来たんだぜえー。命乞いしてヒイヒイいうやつらをよー。女やこどもだって容赦しねーや。

おめーらの命乞いなんざ、一文にもならねーってな」

「ひどい、命乞いする者を殺すなんて」

あたし、怒りがこみ上げた。

「じょうだんじゃねー、命乞いがなんだってんだ。腹の足しにもならねーや。へっ。

俺は、リアリストなのさ。この剣を見ろや、これがリアルだ」

刃のはばがひろい、大きな剣を見せびらかす。

リアリストだって？　ばかばかしすぎ。

「そんなのリアルじゃない。

そんなもん、なんのあてにもなんない。

シヨギョーはムジヨーなのよ」

あたし、いった。

「はあっ？

あたまおかしいのは、この嬢ちゃんのほうじゃねーか？

あへ、あへ、あへへ？」

「そんなこと、いっていいの？

あたしは、青龍の称号を持つ者なのよ。

ムジヨーを侮ったわね」

あたし、これまで青龍の称号を意識した記憶はないけど、なぜか、

その言葉が出た。称号の意味もわかってないのに……

「ムジヨー？

無常のコトくわ？」

あたしは、あわれみのまなざしで彼を見た。ほんと、わかってない。あわれだよね。

人は、おもうかもしれない、正義をまもることなんか意味がないんだ、って。じっさい、どんなにいいことをしたって報われないし、

不幸や病気や死は善人にも悪人にも平等に来る。だから、むなしいんだ、って……

正義をまもることは、ムナシイの？

そのこたえは、イクシュヴァーン学長が基本講座ではつきり教えた。ムナシクはない。真の生命があるって！

むしろ、ムジョーなのに、私利私欲のために正義をやぶるのはムナシすぎる。

そんな人は、いらない。ひつようない。

少なくとも、このIEには、あわない。

IEが排斥するはずの人。

願わくば、青龍の叡智が、この男にムジョーをさとらせることができますように。なぜならば、そうすることが義しいから。義しいなら、実現して。

せめて、ここ、IEでは。

あたしのなかの青龍がうごいた。

叡智があたしのあたまのてっぺんに、天啓の光のように、舞い降りて来た。てっぺんから喉をとおり、胸にたつして、強く光った。強く光ると、白熱し、白い光の炎となり、熱くミゾオチをつたわって、臍下丹田へとつながる。

そうだったんだ。そうだよ。わかった。わかったよ。すごいよ。

これって、なんなの？

わかるって、こんな感じだったんだ。こんなにすごいことだったんだ。

あたし、生まれてはじめて、わかるということを経験した気がした。

すごい、リアル。

あたし、眼のまえの男をあらためてにらんだ。

そうよ。そうだわ。

このおろかな男は、ほろぼされるべき。おろかさは罪だからだ。おろかさって、勉強できないとかじゃない。うまく説明ができない

けど、そーゆうんじゃなくって……。だって、あたしだって、勉強、ぜんぜん、できないし。

『ムジョー』を念じてつぶやいた。あたし、意識することもなく、日常茶飯事であるかのように、その神呪マントラをとなえていた。

「へっ？」

男が異変いへんに気がついて、顔に手をあてる。

「えっ？ えっ？」

男の心臓こどうの鼓動が力を弱める。あたしには、あきらかにわかった。

「はあっ、はあっ、く、苦し」

皮が腐敗ふはいし、肉がただれていく。

「え、ええっ、なんだ、なんだよ、これっ！」

恐怖にみちて眼を見ひらき、男は、あたしをまじまじと見つめなおした。

「おまえか、おまえがこれをやってるのか」

「そうかもね」

あたしがこれを起こしてる？ ぜんぜん、ちがうわ。ほおんとに、わかってない。

「すぐやめろ、さもないと」

「さもないと、なに？ つか、あんたに、なにができるの？ やりたいなら、好きにやれば？ はい、どうぞ。

あんたは、自ら望みずかんでほろんでいるのよ。あたしのせいじゃないわ」

男の肉がくさって骨からおちる。恐怖と苦痛で、その形相ぎようそうがすさまじくなる。

「やめろ、もう止めてくれ。これじゃ、死んじやう、まじありえねー」

「そうなの？ そんなこというの？ あんたが！」

あたし、涙があふれてきた。

「じゃあ、あんたは、いままで、あんたに命乞いのちごいをした人をたすけて上げたの？」

あんたが殺してきた人間は、だれも命乞い^{いのちごい}をしなかったとでもいうつもりなの？

あんたは、『殺さないでください』って懇願^{こんがん}した、罪のない女やこどもや、かわいそうな人たちを、たとえ、いちどでもいいから、殺さないで上げてあげたことがあったの？

あんた自身がしてもいないことを、どうしてあんたがしてもらえらるとおもってんの？

わかる？ それがおろかさなのよ。

たすけるのって、ムリ」

男は、必死^{ひっし}であたしにすがろうとした。

「お願いだ、お願いだっ！

ご慈悲^{じひ}をつ、ゆるしてください、た、たすけてください、死んじやう、これじゃ死んじやうつ、あは、ああああーっ、っあ！ つあ！ うぎやあ、うぎや、あががが、ごぼっ、ごぼっ、ぐひ、ぐぎやあああああああ！

っうぐひ！」

バラバラにくずれて、風に吹かれる砂のように、夜明けの霧^{きり}のように、消えてしまった。

11 Δジヨ―

エリコは、凍^こりついたように、ひきつって口もきけなかった。

いつのまにか、敵^{てき}をぜんぶたおして入って来ていたANKAやイスも言葉をうしなっている。

ぜんぜん、あたりまえのこととして、これを受けいれてるじぶんが、まちふしぎ。

テレ笑いするしかなくね？ だよね？

「やっちゃったお」

「ウソでしょ、あんたがやったんじゃないでしょ？」

エリコがわれに返ってさけぶ。

「ウソっていわれても……まあ、あたしがやったんじゃないんだ
けど……」

「どっちよ！」

「いったい、彼になにが起こったんだ」

イースがつぶやくようにいった。

あたし、説明できない。

「だから、シヨギョーはムジヨーだから、そのとおりになったのよ、
ちよっと、はやいスピードで」

ANKAが理解しがたいってゆう表情で、

「けど、どうやって」

「他力本願……かな？」

「なんなのよ、意味不だわ」

わめくエリコ。

「んー、説明できねーし」

イースが微笑し、

「ともかく、かたづけよう。」

ムジヨーか。

凄い技だ。タカフシ師の講座を卒業しただけのことはある。もし
かしたら、この技は史上最強かもしれない。

諸行無常というくらいだ。なに者もうち勝つことはできない」

あたしもそんな気がする……

「ユリイカが史上最強……」

エリコは、そういつて、ショックを受けたような顔をした。

「なかよくしよーな。ユリイカ」

「なんなんだ、エリコ、あんたって」

こんなときも、ミーシャは、まだ奥ですやすや眠りつづけている。
賊どもがドタドタ入ったせいで、雪でよごれた部屋を少し掃除す
ることにした。ミーシャがやっと起きる。掃除しながら、ANKA
が、

「けど、わたしは、確信したよ。」

ぜったい、おかしい。

キャラ的に山賊さんぞくをたのしむことはあっても、ほんとにひどいこんなことが、このIEでゆるされるはずがない。

システムが正常せいじょうにうごいていない」

イスもうなずく、

「ぼくも気がついてた。アカデミアにむかうとちゅうでオークに襲おそわれたときも、きみたちに、そういったとおもうけど。

なるほど、システム異常いじょうか……」

けど、ANKAが眉をしかめる。

「そうおもいたいんだけど、それなら、修正しゅうせいプログラムが自動的に起動きどうしなければおかしい」

エリコがわざとらしく、大袈裟おおげさに腕をくむ。

「だとすると、あれしかないわねー」

「あれって？ なーに？」

「ミーシャ、あんたねー、少しは考えろ、つーの」

「あたしもわかんないけど？」

わざと、そういつてやった。イスがエリコに同調どうちょうし、

「そうだね。このばあい、考えられるこたえは」

エリコが味方をえて得意げに、

「ウイルスよね」

「ウイルスうーっ？ あんだけバリュースがウザくかぎまわっているのに！」

あたし、おもわず声上げちゃったけど、ANKAがため息とともに同意どういし、

「でも、ウイルスってのが、いちばん妥当だとうなアンサーね、残念ざんねんながら。

ここのセキュリティはかんぺきだっておもってたけど、まあ、これだけ人気サイトになっちゃうと、やっぱりだめなのね。

どうして人間って集まるとロクなことをしないのかしら。

人がともによりよく生きていくのって、ほんと、むずかしいわ」

「たしかにそうだね。ともかくも、ウイルスに感染かんせんしてとなると、しまつがわるいな。

居場所いばしょを特定とくていして駆除くじょするか、隔離かくりするかしないと、どんどん、ひどくなっていく」

イスも表情が暗くなる。

沈黙ちんもく。

ANKAが手をたたいた。

「ごめんね。いま、ここで考えこんでもしょうがないわ。

とりあえず、わたしたちは、管理局かんりきよくにいく。まずは、そこからク

リアしようよ。

できることから、かたづけよう」

森の道をいく。どこまでも下り坂だった。

雪の質が変わっていた。人がうまるほど深い。

木々は高くなり、密度みつどをさらに増してきていた。

オオカミの遠吠えとおぼにまじって、気味のわるい吠え声ほもきこえる。

なにかがひき裂さけるような甲高い声かんだかと、気味のわるい哄笑こうしょうのような

声が。

「こんな場所じゃ、とても停車ていしやして就寝しゅうしん、ってわけにいかないわ。

1時間きゅうけいごとの休憩きゅうけい以外は休みなくいくしかない。ともかくはやくこ

の森をぬけよう。いいかな？

じゃ、さっそく徹夜てつやね」

ANKAがそういった。

食事は運行うんこうしながら、ミーシャがユユといっしょにつくることに

なった。交替こうたいで休憩きゅうけい時に食べる。

あたしは、またディスプレイをにらむ役にもどった。

夜の監視かんしであつても、解析画像かいせきがぞうで、まるで昼間のようによく見える。

オオカミの遠吠えとおぼのすがたも見たし、オークが集団で移動いどうしているのも見た。1匹のオークが山の上から、こちらのようすをうかがっているらしいのも見える。

ゴブリンが略奪品らしきものを奪いあっている。なかまわれか？オークより3倍くらい大きな、人型の怪物がしゃがんで、鹿をむしりながら食べているのも見た。

さっきの山賊とはちがう山賊が火をかこんで酒盛りしているのも見た。その山賊たちは、山賊の衣装を着ているけれど、どれも化け物のようなキャラで、人間の顔かたちをしている者は、1人もいなかった。

幽霊のようなキャラもいた。ぼんやり光って、浮遊している。表情のない蒼い顔で独り、森をさまよっている。

いろんな趣味の人がいるんだなとおもう。

ときどき夜空を、大きな鐘の音声のような不思議な音がひびきわたった。それがなんなのかわからない。

馬のからだと口の裂けたオオカミの顔、鷲のような爪を持っている人喰い馬の群れが、ライトに照らされた夜の海の魚のように、幻想的に光りながら去りゆくのも見た。

深夜、エリコと交替した。

休憩ルームに入ると、ミーシャが寝てる。

あたしは、ミーシャのつくったシチューをなめた。

非録斗は、まだ應龍に乗って前方を警戒している。馭者席では、

ジャジュが手綱をにぎっているはずだ。エチカは、男子用休憩室（倉庫）で寝てる。

窓を見れば、ランプに照らされた吹雪の雪粒が、瞬間的にあらわれては夜の闇に消え去っていく。ものすごいはやさで。

あのユユがイスといっしょにキャビン後部に立ってるかとおもうと、心配になる。

ANKAもジャジュのとなりで、剣を持って立ってるはずだった。迦楼羅が入ってきた。あいかわらず無関心っぽい無表情。

「おつかれー。シチューあるよ。食べる？」

って、あたし。

「ありがとう。じぶんでやります」

鍋なべからすくって皿もに盛る。

「ユリイカ。」

急いそに変かなことをきくけど……。

卒業そつぎょうのときに、称号しょうごうをもらいませんでしたか？」

「え？」

もらったよー」

「どんな称号しょうごうですか？」

「青龍せいりゅうーう」

迦楼羅かるらの眼めが少し大きくひらいてから、眉まゆがわずかにしかめられた。

「龍りゅうの称号しょうごうだ。」

知しってますか、叡智学えいちがくはアカデミアの、いや、I Eのなかでは最も意義いぎのある、最も現実的な、最高の学問がくもんです」

「知ってるよ」

「叡智学えいちがくの最高位えいちにたつた人、最高の叡智えいちにたつた人をパーリとよびます」

「へー」

「その次は、グル。タカフシ師は、グルです」

「知らなかった！ すごーい」

「そして順りゅうに、龍てん、天てん、ラハン、サットウヴァ、ヴァドウン、となつています」

「で、あたしのは、その次くらい？」

「って、ンな、エラくはないか」

あたし、笑わらった。迦楼羅かるらは、また顔かほをかすかにしかめた。

「龍りゅうです。」

青龍せいりゅうは龍りゅうです。

あなたの位階いかいは第3位だいさんです。タカフシ師しの次つぎですよ」

あたし、意味いみがわかんなかった。一瞬いつしゆん、意識いしきが止とまっちゃった。

ふち氣絶きせつ？ で、正氣せいきにもどって、

「うっそーお。まち？ ありえねーよっ」

「事実です。」

大きな力がつかえる人は、龍^{りゅう}の位^{くらい}以上の人だときいていました。だから、称号^{しょうごう}をうかがったんです。

さつきイースとも、その話をしていたんですよ」

そんなバカな……信じらんねーよお……なんか、怖い。

いい終わると、迦楼羅^{かるら}は、黙々^{もくもく}とシチューをすすった。冷め^さてんなー。あたし、シヨックなんだけど……

ま、寝るか。

「えっ、なによ、これ？」

エリコのさけびがきこえた。あたし、仕切り^{しき}の幕^{まく}をひく。

「どうしたのよ！」

「これ、見て」

「あつ！」

黒い鎧^{よろい}に身をかためた騎馬隊^{きばたい}がちかづいていた。5騎^きいる。

「黒いから気がつかなかったのね」

A N K Aが入ってきていった。

「そーよ、さすがのわたしもちかづくまで気がつかなかったわー」

……またかー、こいつの見おとし。

「スピードがちがう。まもなく追いつかれるな。停^とまってむかえ撃^うつたほうがいいね」

ジョリーを停^とめると、レイピアを持ったA N K Aと金剛杵^{ヴァジュラ}を手にした迦楼羅^{かるら}が外に出た。

A N K Aがイースたちにむかっていう、

「戦いの準備よっ！」

あたしは、ディスプレイのモードをきりかえて、ジョリーの周囲360度が見られる画面にする。

すでに、あたしたちは、かこまれていた。非録斗^{ひろと}がブロード・ソードをにぎって應龍^{おうりゅう}から降りる。休憩室^{きゅうけいしつ}からエチカもグラディウスを片手に外へ出ていた。

黒騎士^{くろきし}たちは、なにもいわずに、いっせいに斬^きりかかってくる。

兜で顔は見えない。雪を蹴ちらす音さえ立てない。

後部でイースとユユが闘っているが、ユユって、ほとんど足手まとい。

側面でエチカが応戦していたが、かなり苦戦している。

前面で迦楼羅とジャジュが闘っているが、ジャジュは、すぐに剣をたたきおとされた。

イースが後部の2人の剣を折り、たおした。たぶん、アカデミアの重装機甲騎兵で後悔しているせいかな、あまり重傷を負わせていない。見ていて、それがわかった。

ANKAとユユがたおれた2人に剣を突きつける。

「抵抗するな、おとなしくしろ」

イースは、すばやく移動。エチカの敵の剣をたたきおとし、ふみくだき、剣で兜の上をはたいてたおす。そのあいだに、エチカは、ジャジュの応援にまわる。イースもすぐに前面にむかい、迦楼羅の敵を剣の柄頭でうち、昏倒させる。

勝つかに見えた。

しかし、ジャジュと闘っていた黒騎士は、エチカもジャジュもなぎたおし、イースと剣をまじえた。その大剣は漆塗りのように黒光りしていて、こまかい魔法文字が彫られ、それが黄金いろに燃えかがやいている。兜には血のようにぬれた感じの緋いろの小さな羽飾りがついていた。

強っ！

信じられない。イースが相手の剣を受けきれずに、剣をおとし、蹴りたおされた！

黒騎士がとどめを刺そうと大剣をふりかぶる！

あたし、『ムジョー』をつぶやいた。あたしもイースをみならつて、剣にだけ意識を集中する。

黒い大剣が粉雪のようになって、吹雪のなかに舞いちって消えた。

「ううつ、これがムジョーか！」

黒騎士がかすれる小声でうめいた。

そのとき、とつぜん巨体の黒騎士くろきしが10人あらわれ、関とぎの声を上げた。ああっ、とおもわず、あたしたちが気をとられたすきに、さいしょにエチカと闘っていた黒騎士くろきしがとつぜん立ち上がり、ANKAとユユをはらいのけて、トランク・ケースをあけて、『kOO』を手につかみ、かかげ、

「とつたぞ！」

それをきいて羽飾はねかざりの黒騎士が口笛くちぶえを2度鳴らす。

たおれた黒騎士くろきしたちも立ち上がって馬に乗り、巨軀きよくの黒騎士くろきしともに、あつというまに去ってしまった。

「イス、だいじょうぶか」

ANKAがイスをたすけおこす。

「ああ、たいしたことはないよ」

エリコが、

「いったい、なに者なの？ アカデミアの騎士きしには見えなかったわ」

「奥が深いな」

そうつぶやくイス。

エリコがANKAにきく、

「どうする？ 追う？ 敵は、ムジョーを怖れてるわ」

あたしはべつのことが気になって、

「そう。」

でも、なんで知ってるんだろー」

エリコもうなずき、

「やっぱり管理者かんりしやか、運営サイドってこと？」

ANKAが結論し、

「どっちかっていうと、運営者サイドだね。でも、わからない。さあ、いこう。どうせ、やつらを追っても、追いつけないし。起こったことのありのままを、管理局かんりきよくでうったえよう」

イスも賛成し、

「履歴ログ (Data log) の開示請求かいじせいききゅうをしよう。

どうして『kOO』がトランクにあったか、はっきりする」

エリコが腕ぐみし、

「うーん。開示^{かいじ}してくれるかしら。運営サイドが敵だとしたら」
ミーシャが反論、

「ウイルスとはかんけーあるのかなー？」

ANKAがむずかしい顔をし、

「それも、わからないな」

あたし、

「管理者と、運営者って、どーちがうの？」

「管理者は、運営中枢システムだけど、運営者は、それを監督する人間なんだよ。つまり、作者か、そのなかまってわけ。

こんかいの聖典略奪^{りやくだつ}は意図的な人間の行為だ。ウイルスにやられたシステムじゃない。

敵は、人間だ。運営がわにいる人間か、さもなければ作者がおかしくなったか、だ」

エリコ、

「わたしも、ウイルスと聖典略奪^{りやくだつ}がべつとおもえないなー。
なんだかつながってる感じするよね。

でもさー、作者や運営がわの人間がウイルスをはこぶって、おかしい。だって、彼らなら、プログラム変えればいいだけの話だもんね。ウイルス侵入じゃなくっていいはずよねー。

外部者だとすれば、ハッカーか……」

イスがいった、

「そうか、ウイルスと聖典略奪^{りやくだつ}が同じ黒幕だとすれば、ハッカーしかないってことになるんだな。

まったく理解できないよ。せつかくの理想の世界が、現実となにも変わらない世界になってしまう」

ANKAが、

「現実か……」

ジンみたいな強さがすべてのやつには、むしろ、ちょうどいいんだろうけどね」

あたし、もう1つ気になることがあって、

「ねー、それでおもいだしたんだけど、あの黒騎士くろきしのなかで1人だけ気になったンだけど」

エリコがあたしをにらみ、

「なによ」

A N K Aもいう、

「わたしもよ。あの黒騎士くろきし、ジンのような気がした」

イースがきびしい表情で、

「彼女の太刀たちすじは、ぼくには、はっきりとわかる。

まちがいない、十中八九、ジン・メタルハートだった」

一瞬、だれもがだまった。

エリコがいう、

「それは、彼女も承知しょうちの上よね。つまり、太刀たちすじで正体がバレることは」

A N K Aふたたび決然けつぜんと、

「だったら、深追ふかおいしなくて、なおさら、よかったわ」

そうだ。どんなワナがあるかわからない。でも、あたし、シヨツクだった。

ジンって、イースよりも強いんだ！

エリコは、あたしたち1人ひとりの顔を見ながら、

「つてかさー、わたしたちの居場所とか、行動つてさー、かんぺきにバレてくない？」

：：たしかにそうだわ。イースも考えこみ、

「そうだな。もし敵が運営がわだと、ログが閲覧えつらんされている可能性がある。そうだとすれば、どこにかくれたって見つかる。

うつ手はないが、正規せいぎのルートからは外れよう。もしかしたら、少しはましかもしれない。

効果があるうが、なかるうが、最善をつくすしかない。

ほかにどんな選択せんたくし肢しもない」

そういい切った。

あたしたちは、雪と岩だらけで道のない、氷雪の樹木のあいだを
すすむことになった。路面の状態に影響されない乗りものなので、
苦労は少なかった。岩があるうが、くぼみがあるうが、なめらかに
通過する。

ただし、そういうところは、少々上下にうごくので、連続すると、
波の荒れた海をわたるみたいな感じに、ちよつと酔う（笑）。おえ
つぶ。

馭者は、迦楼羅。

ジャジュが剣をかかえて、そのとなりに坐る。

エチカと非録斗は、男子休憩室で休んでいる。

ユユとミーシャが食事のしたく。

エリコは、食事中。

ANKAがディスプレイをにらんですすむべき方向を検討しつ
つ、周囲の状況を監視する。

あたしも、休憩の時間だったが、眠れなかったので、サンドイッ
チつまみながら、ANKAのとなりに坐って、見ていた。

イースは、独りでうしろのデッキに立って警戒していたが、急に
キャビンにもどって来て、

「なにかがぼくたちを追いかけているようだ。なにかがついてきて
いる」

「なにかって、なによ！」

って、あたし。

「わからない。

雪を蹴ちらす音や、息づかいがきこえるような気がするんだ。

かすかで、ほとんど実体のない、けはいだけの存在みたいな感じ
なんだけど」

ANKAがディスプレイをさらによく見る。

「なにも見えないわ。夜でも光の不足を補正するから、暗いせいで
見えないんじゃないわ。

なに者だろう」

「怖いよー、ANKA。」

だってー、音も立てず、すがたも見せず、このスピードのついて来られるのって、なに者？ 幽霊？」

イースは、ふたたび外へ、

「ともかく背後の警戒をつづける。それしかないようだ」

怖くないの、この人？ 恐怖も怒りも哀しみもなく、たんととなすべきことをなす人だ、イースって……

ANKAがエリコを起こす。

「わるいけど、ジャジュと交替してくれない。

で、ユリイカは、ディスプレイ見てて。あたしもイースのところへいくわ。

さあ、ユユ、エチカを起こして。

ジャジュとエチカには、左右のデッキにいつてもらうわ」

緊張して、画面をにらみつづけた。なにも起こらなかった。

しだいに疲れてくる。緊張がゆるむ。からだはポカポカしてるし。

「うわっ」

迦楼羅のその声で眼がさめた。

ディスプレイを見ると、應龍が止まっている！ あたし、いつのまにか、寝ちやっていた。や、やばーい、やっちゃったよー。

すでに夜は明けていた。雪はやんで、黄金の朝日がかがやいていた。

キャビンの外に立っていたエリコがさけぶ、

「なによ、いったい、どーしたのよ!？」

あっ、ちよー怖えー」

あたしもあわてて外に出た。

「ごめーん、寝ちやったおー」

風もやんでいた。日射しのせいで雪がすごくまぶしい。

せまくて深く切りこんだ谷のまえにいた。

迦楼羅がいう、

「あぶなかったよ。気がつかなかった。

ずーっと、木や岩だらけのせまい場所だったのに、とつぜんひらけた！まぶしいっ！っておもったら、こんな場所だったんだ」

谷のむこう、正面は切り立った山で、1キロメートルくらい離^{はな}れている。垂直^{すいちよく}にそそり立つ絶壁^{ぜつぺき}。

あたしもジョリーを降りて谷底^{たにぞこ}をのぞきこむ。ゾツとした！眼がくらみそうだ。

イースは、淡々^{たんたん}と、

「ぼくたちは、ずっとつけられていたし、いまはかこまれている。しかし、これまでのふんいきからおもうに、襲^{おそ}われる可能性は低いだろう。

彼らは、おそらくI Eの『眼』だ。ぼくらの位置^{いち}を報告してるんだ。

だから、彼らに襲^{おそ}われないといっても、このままじゃだめだ。彼らをまこう。飛ぶしかないよ。

ジョリーの4か所をロープでむすんで、應龍^{おうりゆう}の首と腰からつるして飛べばいい。

4頭の海馬^{かいば}は同じように、2頭の麒麟^{きりん}につるす。

さあ、エチカ、ジャジュ、迦楼羅^{かるら}、ユユ、非録斗^{ひろと}、手つだってくれ。

まず、ロープを出そう。みんなでやれば、5分とかからない」

ANKAが手を翳^{かざ}して日射^{ひざ}しをさけながら、むかいの山頂^{さんちよう}をおおぎ見て、

「それがベストだね。

飛ぶほうがはやし。

管理局はその眼^{だん}のまへの断崖絶壁^{だんがいぜつぺき}の山をいくつか越えて、そのさきにある山の頂^{いただき}……のはずよ」

いいんだけど、怖くない？　って、やっぱりおもったとおりで、「やばい、やべー、ちよっ、ちよーやばいよっ、うわっ、うわっ、うわああああーっ！　エリコ、なにすんのよっ、あぶないっ」「うざいつ、わ、おちるっ、うぎやああーっ、うぎやああーっ、

うぎやあぁーっ、うぎやあぁーっ、ユリイカ、あんた、どきなさいよーっ」

「わぁー、すごい、すごい」

「ミーシャ、窓から顔出さないで、しつかりつかまってなさい！」
「ぎやーぎやーぎやー」「こわいよ、こわいよ、こわいよーっ！」

ってなことになった。だって、ゆれる、ゆれる！ はやし！

ようやく、断崖絶壁だんがいぜつぺきまで着くと、岩棚いわだなを見つけて着地ちやくちし、こんどは、その垂直の岩壁を登りはじめた。應龍おうりゆうと麒麟きりんは駈けるように垂すい直ちよくに飛び、海馬かいばは絶壁ぜつぺきを液状化して滝を登るように上がっていく。

いいんだけど、ジョリーのなかのあたしたちは、たいへんなことに。前部の壁にぶら下がったり、後背部こうはいぶの内壁うちかべに坐ったりだ。デツキにいたイースは、キャビンの外壁がいへきに坐ってるし。

頂上までいくと、つぎの山があらわれ、その山も断崖絶壁だんがいぜつぺき。こんどは、その絶壁ぜつぺきへ、飛ぶ。そのくりかえしだ。

山をいくつ越えたの？ 2、3じゃない。なんかANKAのいいかただと、2つ、3つ越えればいいみたいな感じだったけど？

眼もくらむような高さの峰みねと峰みねとのあいだを、すれすれに飛ぶ。雪と岩しかないがった山は威圧いあつてき的だった。青黒く深く光っていて、きびしい。

山脈さんみやくをすすむうちに、山がどんどん高くなる。もう、雲なんて、はるか下の下だ。

すさまじい高さの山の一群いちぐんのまえに来た。

そのうち1つが異様いような高さで、成層圏を越えて、宇宙にまでとどきそうだった。

「北大陸ノルテの最高峰さいこうほうカム・イ・アレズヲ山だ。

管理局はあの頂上にあるらしい」

こうしてあたしたち、着地ちやくちした。

エリコもまっ蒼さおになっているし。なんで、ミーシャって、たのしそうなのわけ？ ジェットコースターじゃないっつーの！

舳おしに剣を立てて、ゆうぜんと立っていたイースって、ハンパじゃ

ない。

雪はない。寒さは凍^{いて}てつく寒さ。風もない。

管理局とおもわれる建物は……………

ふぞろいな自然の石を、てきとーにつみ上げたものの上に、藁^{わら}や茅^{かや}を葺いた（つか、かぶせた？）だけの粗末、てゆーか、原始^{げんしてき}的な家。

なんだ、こりやあ。

ありえねーだろ？

こんな家じゃ、寒くて、とてもここじゃ生きていられないような気がするけど、気のせい？

『I E 異議申立受付所』

風雪^{ふうせつ}？に朽^くちたふうの木製^{もくせい}の看板^{かんばん}がぶら下がった建物のまえに、あたしたち、立つ。しずかすぎる。人^{ひと}気^けはない。空気が純粹、てゆーか、すごく希薄^{きはく}だ。

そもそも異議を申し立てる人の便宜^{べんぎ}をもうちよつと考えたほうがよくない？　こんなところにあるって、とうてい、受けつける気があるとおもえない。

「ごめんください」

ANKAがいった。

いびつで、ゆがんで、ガタガタの扉^{とびら}があつた。

しずかにあく。だれもないのに…………

「いこうか」

ANKAが歩み、すすむ。

なかに入る。

がらん、としてる。

古びた質素^{しっそ}な木の床。暖炉^{だんろ}には香^かりのよい木が燃えている。毛皮^{けがわ}の敷物^{しきもの}はなん百年もまえから、ふまれつづけたように、いろあせてくたびれている。

奥^{おく}には葦^{あし}を編^あんだ簾^{すだれ}があつた。

意外に、まともだ……………

中央に机があり、羽ペンが立っている。羊皮紙が1枚おかれていた。

「異議申立書だ」

ANKAが手にとって、いった。

「これに書けばいいんだな」

イースがペンを手にしながら、そういう。

「待て！　そして、希望せよ」

簾をめぐって人が出て来た。

「え？」

「いくら言葉を綴っても、インクと羊の皮でしかない。精神がそれをささえて実存となる。約束ごとをまもうとする人々がいなければ、無味乾燥な、物的なものでしかない。」

なにを書こうが、一昨日のタブロイド紙どうぜん（笑）」

あらわれたのは、まかふしぎな男だった。

大きくハデなカフスのついた水いろの縹子地で、ひざだけのロング・ミリタリー・コートを着ている。

カフスは螺鈿のボタンでとめられ、レースの飾りをひるがえす。肩飾り、房飾り、金の飾りひもで満艦飾。黒い帽子はウィザードハット。山（クラウン）が高くがって鰐（ブリム）がひろい。しかもクラウンはとちゅうで折れてたおれている。

片眼鏡をかけ、腕時計にブライトリング [CHRONOMAT BO1 シリジ ユレッド／ゴールド・インデックス]、口髭顎鬚頬髯を伸ばし、ヘソにとどくくらい長い……

スキニーなジーンズをはいてて、マッチ棒みたいな脚がさらに棒っぽい。けど、リーバイスのデニムは16オンスのヘビーなやつ。蛇皮のロング・ブーツが型くずれしすぎて、むかしのルーズ・ソックスみたいになってる。

キャラバッシュ・パイプ「キャラバッシュ（南アフリカ産ヒョウタン）をボディにし、タバコを入れるボウルにメシヤム（海泡石）をつかったもの」を片手に持ってる。

「ふ。」

さあさあ、はやくここを去りなさい。

一瞬も止まってはならない。一刻の猶予もならん。

IEの特別高等警察がせまっているから。異議をとなくても、ムダだ。力のまえに、すべてがむなし。色即是空だ。

力は、ただ力であって、いつさいの正しい考えもなく、ほしいものを力で奪い、弱き者をふみにじり、優しき者をだましておとし、欲望のままに手をひろげ、つかみ、とり入れ、吸収し、大きくなる。

ふ。

なんの根拠も、理由も、意味も、正義もない。

ただ、なにもない、ネヴァーモア」

「シヨギョー、ムジョーだ」

あたしがこたえた。彼は、愉快そうにあたしをながめた。

「青龍のユリイカだね。」

きみには、窮極的な問題解決の糸口となる奥義を、いまのうちにあたえておこう。

なに、むずかしいことではない。だれもが知っていて、それゆえ、だれにも知りえないことだ。

小生は、それをこういい表わす」

ジーンズのポケットからBlues Harpをとり出し、両手でくるむようにつかみ、唇に強くあてて頬をふくらませ、半音下がっていてちよつとミュートしたような、金属的な、乾燥した、色彩のない、即物な音を出す。

手でつかめそうだ。

「つてことさ。これが『kOO』の真髓だ」

「あなたにそんなこと、いいきる資格があるの？ それはタカフシ先生クラスか、それ以上の人の発言よ。」

「だいたい、『kOO』の真髓って、なによ」

「いま、きみがきいたHarpのなす金属片のふるえさ。」

それ以上でも、それ以下でもない。『kOO』は、

和綴冊子本、わとじさつしほん 粘土板、タブレット 羊皮紙、ようひし 皮革装订上製本、ひかくそうていじょうせいほん 岩壁彫、がんぺきぼり
卷子本、かんすほん 蒔絵、まきえ 象嵌、ぞうがん 貝多羅葉、ばいたらよう 椰子の葉の綴、つづり 竹簡、ちくかん
かな料紙しよじちらしがき etc、

ってことさ」

「どーゆーいみ？」

「『kOO』は本 (a book) なのや」

「『kOO』わ、本なの？ そりゃー、ホンでしようケド」

「書いてある内容じゃないってことだ。」

内容が正解でも誤謬ごびゆうでも、真実でも虚仮こけでも、是でも非でも、同じだ。

同じであろうが、ちがっていようが、同じだからだ。だから、ちがうでも、いいんだ。同じだ。考概ラテイオはカラカラに乾いたトカゲの皮膚だからだ。

つまり、ただ、本 (a book) なのや。

どこにでもある、ただの a book だ。

それが『kOO』の卓越性たくえつだ」

「…あ、あのさー。」

まあ、いいや。なんだか、なんとかってゆーお坊さんとお弟子さんの会話みたい」

「同じじゃない。」

だが、ちがうと同じは同じだ。だから、同じといってもいい。わかりにくいか。

いや、わかるはずがない。わからなくて正解だ。

誤謬は正解なのさ (笑)。

だから、だれでもわかっている。すなわち…

理解できないもの、最もカンケイなさそうなものが、ハマるであろ、う」

「あなたは、なに者？」

エリコがきいた。

「小生か！」

おお、小生は、RWから委嘱された監視委員の任にある者。
サイト内で不適正なことがおこなわれていないか、監視するのが
役わりにてそーろー」

イスがすすみ出て、

「ならば、IEのこの現状を調査して摘発し、しかるべき措置をと
るべきでは？」

「さよう、IEは作者の意図にそぐわないウイルスに感染している。
作者もウイルスをさがしている」

「リアル・ウイルス・・・さがしても、見つからないのか。作者もさが
せない。どうしたらいいんでしょうか？」

ANKAがそういった。

「きみたちは、ウイルスの存在に気がついた者、眼ざめた者だ。多
くの者たちは、罰がなくなつたので、つぎつぎと罪をおかすように
なつた。なんという愚劣さか。」

きみたちにとくべつな権限をあたえよう。

IEの運営中枢は、ウイルスにおかされている。ふつうに考えれ
ば、ハッカーによる干渉だとおもわれるが、そうすると、きみたち
がいつどこにいても見つかるのが、おかしい。

それは、管理者システムか、運営者でなくてはできない。

事情はあきらかではない。だが、とりあえず見つからないように
すべきだ。小生は、きみたちに監視委員の権限の一部を委託しよう。

これでもう、IEの運営サイドからさえも干渉されることはない。
居場所をたちどころに察知されてしまうこともなくなる」

「ありがとうございます。」

IEの履歴が見たいんですが。方法はないでしょうか」

「クドク・ポイントが高い者には、アクセス権があるはず。

いまは、説明の時間はない。光陰矢のごとし。時間がない。急い
でここを立ち去れ。」

いくがよい。是非もない、真の現実の世界へ!!」

外に出ると、すでに特別高等警察の先陣が到着していた。

こいつらも黒い鎧兜の騎士だ！

けど、彼らの剣は深紅の刃だった。楯には正義をしめす光輪の紋が浮彫されていた。

「突撃せよ！」

ふるう剣で雲が集まり、雷霆が山をゆるがす。地面がわれた。

イスは、抜剣し、

「こいつらは環境的人物だったね、ANKA」

「そうだよ」

「じゃ、あわれみはいらないね」

イスは、ぶあつい鋼鉄の鎧が飴でもあるかのように、つぎつぎと切りきざむ。容赦なくたてに裂き、よこに断ち斬る。あざやかな血がほとぼしる。

しかし、非情なる特高警察は、腕を斬られても、足を切られても、すぐに立ち上がり、ずいずいせまって来る。

「あつ！」

エリコがさけぶ。

「なによ」

「あれ見て、特高の飛行部隊よ」

「え？」

空を見ると、大きな鉄の翼をはばたかせ、マシンガンやバズーカ砲をそなえた漆黒の騎馬に乗った重装機甲騎兵の一団がせまっていた。

「戦闘機みたいな馬ね」

「あの翼は機械なのよ。イカルスってよばれてるわ」

「じゃ、正義の太陽のまえでは墜落する運命なのね。ってゆうか、あれをこわせばいいんだ」

あたしは、意識を澄ました。翼に集中し、ぼんやりムジョーをとなえた。翼がうごきをぎこちなくし、パーツがポロポロおちはじめ、ばらばらに裂ける。もはや飛行はつつかず、驚愕の表情をなす特高

どもがあわてふためきわめき、手足をばたばたさせながら、つぎつぎ墜落する。翼の崩壊は止まず、もっとこまかく砕け、砂や塵ちりとなつて風に飛ばされ、消える。

「さあ、いまのうちに出発しよう」

あたしたちは、ふたたび飛んだ。

「履歴りれきを見られるかどうかためしてみよう。見るには、どのくらいクドクがひつようなのかしら？」

条件は QDQ1000 だった。あたし、OK じゃん。

エリコがいう、

「つーことわさー、敵がわに QDQ1000 以上のやつがいたら、あたしたちがどこにいても、居場所がわかつちゃって、襲撃したり、監視したりすることが、かんたんにできちゃうってことじゃん。」

もし、ジンがそういうやつらとつるんでいたら……そうよ、だから、ジンは、わたしたちを襲うことができたんじゃない？」

イースは、うなずくが、

「たしかにそうだ。」

しかし、そんなに QDQ が高い者は、なん人もいないのではないのか」

「でも、その数人がどんなやつか、わかってないじゃん。なにたくらんでいるやつか、わかってないじゃん」

「うむ」

A N K A がいう、

「待って。」

敵は、ただ、ログを見ることができるだけじゃないわ。それ以上に、プログラムに干渉できるし、ウイルスとも関係している可能性があるのよ。

プログラムをいじることができるなら、ログを見るなんてこどもだましでしょう」

あたし、

「ともかくさー、見てみようよ、履歴ってやつ」

あたしのケータイからアクセス。

アクセス後の操作は、ANKAにまかせた。彼女がいう、

「履歴からさぐるには、かなりよりよいくやっても、時間がかかるわ。それまで待っていらんない。」

ともかくレオン・ドラゴにむけて飛ばしましょう。ジンは、レオン・ドラゴにむかうはず」

夜になった。山々の峰々がさらに威嚇的に見える。

高いところにいるせい、月光がちかい。窓からながめながら、あたしたちは、語りあった。

「ジンは、だれの指示で動いているのか。なにかたくらんでいるのか。」

いずれにせよ、わたしたちをおとしいれようとしている黒幕と、とりひきしてるのよ。ぜったい」

エリコがそういった。あたしも、そうおもう。

「だよねー。」

アバターは、あたしたち人間が操作するんだから、環境的人物とちがって、ウイルスから、ちよくせつ影響をうけるはずない」

しかし、ANKAは、

「でも、まったく受けないかどうかは、よくわからないわ。」

なにしろ、脳にちよくせつ接続しているのと同じだからね」

イースは、異議をとнаえ、

「だが、洗脳されることは考えにくいな。」

もしそうなら、もつとまえに問題化しているはずだ」

「そうね」

ANKAは、おもいにふけりながらも、そううなずく。エリコが話をもととの議論にもどし、

「ともかく、ジンよ。」

ジンのやってることは、盗賊連中みたいに、世の中が物欲主義に変わったから、なんとなく金かせぎに魅せられているってのとは、わけがちがう」

「まちがいなくね。あきらかに、なにかをねらい、たくらみ、ぼく
らから『k O O』を奪^{うば}った」

ミーシャ、きく、

「だれが指示^{しじ}してるの？」

「あんた、バカね。ウイルスをはこんだやつに決まってるじゃん」
そのいいかた、あたし、他人ごとながらムカつき、

「だから、だれよ」

「あんたねー、なん万人ユーザーがいるとおもってるの？」

わかんないわよ。少なくとも、いまは。時間をかけなくっちゃ、
わかるわけないじゃん」

「あたしー、もー眠いよー」

エリコのいうのは、もっともだと思った。憂鬱^{ゆううつ}になる。

「でも、なんで。なんで、あたしたちがねらわれるの？」

シーレオーノ行き^{れっしや}の列車で見はられていたのも、けつきよくは、
こういうことだったんじゃないの」

A N K A もうなずき、

「そうね。バリユースのうごきも、ジンの行動と無関係ではないか
もしれない」

イースも考えこんで、

「とすれば、バリユースの行動には、どんな意味があるのだろう」

「うーん。なにかなー。わたしたちがウイルスをはこぶからじゃな
いよねー」

「そりゃーそーよ、ミーシャ。

むしろ、ウイルスを持って来たのって、わたしたちをねらってい
る連中のほうなんじゃない」

「うん」

それ以上、いうべき考えがだれにもない……

ジョリーは山脈^{さんみやく}を越え、高度^{こうど}を下げた朝、山間^{やまあい}の、ひろい場所に
出た。

さいしよは、平原^{へいげん}いっぱい^{へいげん}の雪だとおもった。まっ白さがきつく

て、ものすごくまぶしい。眼が痛い。

「塩よ、シュッドレヒトっていうのよ」

A N K A がいった。

「ぜんぶいちめん、塩なのよ。」

すごいでしょー。ここは、むかし、塩分の濃い湖だったの。それが干上がって、このシュッドレヒトになったのよ。

ここだけは、ふしぎと、雪も雨も降らないの」

見わたすかぎり、地平線のむこうまで、まったいらで、ぜんぶまっ白な塩なの」

あたし、飽きることなくながめつづけた………

ふたたび山岳地帯に入り、いくつか丘を越えると、樹齢数千年の大木がしげる暗鬱な森があり、そのはるかむこう、とおくに大きな平原が見える。

そこは緑いろでどこまでもひろかった。

「あれがハン・グアリス大平原だよ」

イースがそういった。

12 ハン・グアリスの平原

「なにもない、緑の草の大海原さ。」

むきを変えよう。なぜなら、あそこはレオン・ドラゴの王アルハンドロⅢ世の領内だ。

さあ、ちかくに街道があるはずだ」

イースの言葉で、あたしたちは、進路を変え、ハン・グアリスにはむかわず、森のほうへ、低く飛んだ。

天候が雨に変わっていた。

I E に来てから、はじめての雨だった。

A N K A がカーテンのむこうから出て来た。あたしのケータイ持って。

「わかったわ。やはりジンたちは、レオン・ドラゴにむかっている。

ルートと進行方向から推定して、街道かいどうぞいにあるイ・エンジェー
ロ村に宿やどをとる可能性が高い」

イスが剣にそつと手をおきながら、

「もう、ぼくらのうごきは気がつかれていないはずだよね。

奇襲きしゅうをかけられる」

エリコがケータイ片手におきあがつつて、

「そうでもないみたいよ。これ」

見た。

ニュース版だ。

『叡智学の高位取得者』『kOO』を略奪りやくだつ

先日、高名なタカフシ師の講座を修得しゅうとくし、アカデミアを卒業して
青龍せいりゅうの称号をえた高位取得者ユリイカは、傲慢ごうまんにも自ら『kOO』
を所有するにふさわしい真理の究竟者くきようしやと称しょうして、文書館所蔵の『k
OO』を奪うばつて逃走とうそう。

ただちに追跡ついせきにおもむいたアカデミアの重装機甲騎兵じゅうそうきこうきへいおよび特
別高等警察重装機甲騎兵空挺部隊の手をたくみに逃れ、現在も逃走とうそう
中。
ちゆう

現在、各地で連続している『kOO』盗難事件とうなんじけんと関連あるものと
して、司法当局で調査中とのこと。
しほうとうきよく

以下に逃走中のユリイカとその仲間4名の画像を公開する』
あたしたちの写真がデカデカと掲載けいさいされていた。

「ひどい。

しかも、傲慢ごうまんにも、つてなによ！ あたしが首謀者しゅぼうしやつてこと？」

あたし、ショックだった。エリコもふんふん、

「でしょ？ さいあくだわ。だいたい、手を逃のがれつて、なによ、み
ごとに撃退げきたいしたんじゃない。こいつら、じぶん都合つごうよく話してる
んだー」

「そこじゃないんだけど」

と、あたし……

ミーシャだって、さすがに憤慨ふんがいし、

「さいあくー、ひどいよー」

イスも表情をくもせ、

「これでは、うかつに外へ出られないな。

考えたもんだね。ぼくたちのうごきが確認できなくなったものだから、公開にふみ切ったんだ」

あたし、リアルに憂鬱だった。サイトでたたかれるなんか比じゃない。理由すらわかんないし。

「氣にするな」

非録斗がよこに坐った。

「氣にするよー。ムリいわないで。なんでねらわれたり、誹謗中傷されたりしなきゃなんないわけ？ しかも、さいしょッからだよ。運営サイドから、なんだよ」

「いまのIEは正常に機能していない。

ユリイカは、なんにもわるくない。病むなよ。僕がまもるから」
非録斗、最高！　なんか、きげん直っちゃったあ。かな？

「さあて、これからどうするかよね」

ANKAが地図をひろげて考えこみながら、皮肉に微笑み、

「イ・エンジェーロにむかおう。覆面でもするか（笑）」

村は平たい石をつみ上げただけの粗野な塀でかこまれ、樺の木が
がんじょうそうな門にまもられていた。

扉は閉ざされている。

フードつきのポンチョを深くかぶり、ジャジュがバルコニーから降りて門をたたいた。声を上げる。

「旅の者です。村に入れさせてもらえませんかー」

しばらくは雨音だけかしなかった。とうとつに、のぞき窓がひらいた。ギョロギョロした眼だけが見える。

「なに者だ。どこから来た？」

ジャジュは、努めてほがらかに、

「アカデミアからです」

いうひつようなないよぶんなことはしゃべらない。ジャジュには、

そういうかしこさがある。アカデミアっていえば、相手も安心して（就職さきにむかう新人がほとんどだから）…

かげんそうに眉をつり上げて、門衛の男は、

「言葉だけじゃ、信用できん。いうだけなら、だれにでもできるわい。」

ぶっそんな世のなかじゃ。せっぱつまった難民がアカデミアから来たなんて嘘いわねーともかぎらんしな」

「難民だつて？ このIEで難民なんているもんか……」

仮にそうだとしても、難民は、救うべきではないか」

「じようだんじゃねーや。」

餓えて凍えて、追いこまれて、なにするかわからん連中じゃ」

「ひどいことを。」

苦しんでいるから、やむにやまれずに道に外れたこともするのでしょう。

だから、そんなことになるまえに、あなたの持つ食糧や衣服をあたえればよいではないですか。そうすれば、あなたは、大きなクドクがえられます」

「はははっ。クドクなんて、このご時世、なんの役に立つもんか」

「ばかな、ここは、IEだぞ」

「それがどうした。とつとといっちまいなっ」

そのようすを見ていたイースがマスクをして降り、ジャジュに替わっていう、

「おつとめ、ごくろーさんです。難民ではない証をお見せしましょう。」

どうか、おちかづきのしるしに」

手になにかにぎらせた。もちろん貨幣だとおもう。門扉はあいた。

門をすぎてから、ジャジュが、

「なんてことだ。腐りきってる」

吐き棄てるようにいった。

イースがなだめる。

「気にすることないさ。これからは、きつとこういうことによく遭うことになるかもしれないし」

ANKAが冷めた顔で、

「どこ国の、どこの地域の人たちが、どういう理由で難民になって、どこに、どれくらいいるか、あとでしらべよう。

いまは、なにもしてあげられなくても、なにかできるときがくる」
ジャジュがうなずいた。

「たしかにそうだね」

村にある旅籠は1軒だった。

「ここしかないね」

1階が食堂で、2階が宿泊室になっている。2階の窓はぜんぶとじられていた。人影は……なさそうだ。

「上から見られている可能性はない」

イスがつぶやく。

ジャジュが旅籠の車寄せにジョリーをよせた。ANKAがささやく、

「じゃ、ジョリーを裏の厩にまわしながら、エチカと迦楼羅とで厩のすべて、建物のすべて、周囲のようすを見て来て。

ジンたちのあの、ダチョウみたいな龍がつながれていないかとかね」

エチカと迦楼羅がすばやくジョリーを裏へまわす。

ANKAが降り、食堂の扉のまえに立った。

「いい？　いくわよ。」

くれぐれも、しんちょうにね。

いきなりジンたちと出つくわしたくないからね」

ジャジュとイスがつづいた。エリコとミーシャとユユ、そして、あたしと非録斗。

入ったとたん、肉を炙るにおいにつつまこまれる。

「あーん、おなか空いたー」

ミーシャが小声でいった。エリコがにらむ。トイレをさがすよう

なふりをして、ジャジュが奥にある部屋をのぞき、なにげない顔で階段をのぼりはじめた。

店の中央にはレンガを組んだ上にのせた大きなグリルがあつて、肉や野菜が炙り焼きされていた。

お客は少ない。男の人が3人だけ。あたしたちは、目立たない席をめざした。

奥の窓ぎわ。ちよつと、すきま風寒い。けど、外のうごきがよくわかる。

おくれて来た迦楼羅がイースの耳にささやく。

「厩には、あの生きものはいなかった」

エチカは、ジャジュを追うように2階へ。

エプロンすがたのオジサンがニコニコしながら、注文をとりに来る。

エリコが声をおさえてオーダー。太ったおばさんが来てフオークとスプーンとナイフとをならべる。そのあと、イースが、

「難民がこのあたりにいるらしいってきいたが？」

かなしそうに眉をしかめて、オジサンが話し出した。

「ええ、そうなんですよ。大きい集団や小さな集団が平原のあちらこちらにいます」

「いったい、どこから来た難民ですか」

「ヴォゼヘルゴですよ。あの国の民族や宗教が複雑なこと、ご存じでしょうか」

その問いに、ANKAがこたえた、
「知っています。」

ヴァルゴ教、シルヴィエ聖教、ジゼルス教、ゾドア教がおもな宗教だ。

ヴォル人、ゼエリ人、ログ人、レオン人、ドラゴ人、アッシーラ人、セリヴィド人がおもな民族」

2人の少年が茹でたジャガイモと焼いたシカ肉を盛った大皿を持つて来た。水の入った瓶と木製のコップが卓上におかれる。

イスがそつと、席を立つ。

「そのとおりです。」

ヴォゼヘルゴのデヴォキサ・シロワテル・ボダシエヴィ大統領は、
ヴォル人で、ヴァルゴ教正統派。
きようせいとうは

きようこう 強硬な原理主義者でもあります。

にゆうとう 入党からわずか1年でVAV（ヴォル人正統ヴァルゴ教徒党）の
とうしゅ 党首となったボダシエヴィは、さらにその2年後の大統領選挙で
あつしやう 圧勝しました。

大統領となった彼は、ヴォゼヘルゴの土地はヴォル人の祖廟の安
そびやう らぐ土地、先祖伝来の固有の領地、民族の魂魄が眠る場所と主張し
せんぞでんらい こゆう りやうち みんぞく こんぱく て、異民族を冷遇、いや、排斥する政策をはげしく、徹底して強行
いみんぞく れいぐ はいせき せいさく てつてい きやうこう しました。

土地を奪われた人々は、ボダシエヴィを恨み、抗議運動を起こし
うば うら こうぎうんどう ましたが、大統領は、はげしくこれを罵り、武力で鎮圧し、死者は30
のし ぶりよく ちんあつ 万人を超えました」

イスとジャジュがもどつて来た。

「2階に人気はない」
ひとけ

「推測があやまっていたかな。それとも、これから来るのかしら……」
いらい 「それ以来、ボダシエヴィは、ヴォル人以外の民族の主張を、いつ
みんぞく しゅちやう さい受け容れず、言論や活動の自由を制限したんです。
げんろん せいげん

政治的なことだけじゃなくて、宗教や学問や芸術、すべてについ
てです。

すぐに、民族間で貧富の格差が大きくなり、地下に潜伏した抵抗
みんぞくかん ひんぷ かくさ せんぷく ていこう 運動は他国と通じて武装しました。
うんどう たこく つう ぶそう

そのため、ヴォゼヘルゴでは、テロが頻発し、ついに虐殺と報復
れんさ ぶりよくとうそう ぼつぱつ ないせん ひんぱつ ぎやくさつ ほうふく の連鎖から武力闘争が勃発、内戦が起こったのです。

戦火と政府の拷問と大虐殺とを逃れるために、ヴォル人以外の
せんか なんみん せいもん だいきやくさつ のが きんりんしよく 人々は、難民となって、近隣諸国にあふれるようになりました」

「よくある話ね」

エリコが口をモグモグさせながら、そういった。

ANKAは、即座にその言葉を否定し、

「現実世界ではね。」

でも、ここは、IE。そういうことが起こるはずのない場所よ」

「とくに、シュッドレヒトのセリヴィド人は、徹底した迫害を受けています。」

難民のうち、シュッドレヒト・セリヴィディアンが占める割合は、

ほかの民族とは比較にならないくらい高いのです」

「シュッドレヒトか……あの干上がった塩湖」

「そうです。北大陸最大ともいわれる塩の大生産地です」

「なるほど。民族の問題だけじゃなくって、現実的な利益をむさぼろうとしているやつらもいるってことね」

エチカももどって来るなり、おおげさに腕をくんでうなずき、

「まことに、なにごとにつけ、原因が1つということはありえないものだ。なにごとにも、かならずや複雑系的に理由がからみあっている。この問題もまた奥が深い。ふんふん」

ユユがミーシャにきく、

「これは、なんの肉かな？」

「知らないよー」

「羊だとおもうけど」

エリコがそうこたえる。

非録斗が尋ねて、

「テロはどんなことが、どのあたりで起こるんですか」

「人が多く集まるところです。」

お店の多い大通り、市場がひらかれる場所、祭日の広場……です。つかわれるのは火薬を集めた爆弾です。無差別に女も子どもも殺されます。怖ろしいことです。殺戮です」

ミーシャがかなしそうな顔で、

「ひどい」

エリコがよこ眼で見て、無言。モグモグ。

あたし、ANKAにきく、

「どうすべきかしら」

「ムリね。いまは、ジンを追いましょう」

イスがうなずきながら、

「いまのぼくらにできることは、たかが知れてる。

なんみんきゆうさい こっか
難民救済は国家レベルのプロジェクトだ。大きな組織と経済力が
なくてはできない」

エリコがせせら笑った。

「王さまたちがやってくれればね」

あたし、ムカつく。

「あんたねー、性格、わるすぎだよ。そんなことよくいえるねー」

「ねー、あれさー、ちよっと見てー」

ミーシャが窓の外を指さして、そういった。

かるら ゆううつ
迦楼羅が憂鬱な表情で、

「いや、事実は事実。リアル・ウイルスにおかされたいまの情勢で
は、たしかにエリコのいうとおりかも」

エリコが得意げに鼻をふくらませる。

「ユリイカ、あんたには、なんにもわかりやーしないのよ。

もし王がなんの得もないことしたくないっていったら、どーす
んの？」

「知んねーよ」

って、あたし。

ミーシャが、

「ねー、あれさー」

「ミーシャ、どうしたの？」

ユユがやつと気がついてそう尋ねた。

「ねー、あれよ、ちゃんと見てよー！」

「うざいわねー、マジな話してんのよ」

窓の外、凍てつく雨が降っていた。風は冷たさをましているよう
だった。

はたご
旅籠の庭で、ジン・メタルハートたちの鋼鉄の頬あてを撃ち、
こうてつ ほほ
鎧

の飾りをひるがえさせている。

「うわっ、やばいじゃん！」

鳥のような龍に乗ったジンと4人のなかま、そして龍馬に乗った10人の重装騎兵たちがいま到着したところだった。それが窓から見えていた。

「ばか、ミーシャ、はやくいいなさいよ」

「いったもーん」

イースは、なにもいわず席を立て、扉にむかった。

エチカと非録斗が調理場にまわる。

迦楼羅とジャジュは、2階に上がった。

ユユも調理場の裏口から、そっと抜け出す。

「あんたは、ここにいる、ユリイカ。わたしたちをまもるのよ」
ANKAがそういつてウインクする。

「ジンのうしろのボックス、あれに入っていそうね」

エリコがそういいながら、窓に顔をちかづけて、じつとにらむ。

イースが庭に飛び出し、するどくさげぶ、「ジン、覚悟しろっ！」
まっしぐらに突撃だ。

メタルハートがすさまじい形相でふりむく。佩いていた大剣をす
でにふり上げている。

2人の剣がぶつかるとき、電光が走り、地面がゆれた。

装甲を脱がない女、褐色の肌に黒髪ストレートのアンジェラが背
後からせまる。青く深いまなざし、色白で血いろの唇をしたメアリ
ーも。ひきょうだわ！ あたし、つぶやく、

「ムジョー」

アンジェラとメアリーの剣がくずれる。ジンの手が一瞬、止まっ
た。

イースは、その機に乗り、ジンの大剣をはらい落とし、とおくへ蹴飛
ばす。

ジンの眼が剣のほうへいく。その瞬間、イースは、鳥龍の背後に
まわって、箱を手にとる。

それと同時に、迦楼羅^{かるら}とジャジュが2階から飛び降り、瞳孔^{どうこう}が紅いイヴィラ・ヴィシヤスと青白い顔でどこを見ているかわからない魔女のようなエピタフィラに襲^{おそ}いかかる。

裏庭からそっとまわって10人の重装騎兵^{じゅうそうきへい}たちの背後にあらわれたエチカが長さ5mの大槍^{おおやり}をふるって大暴れ。非録斗^{ひろと}があらわれ、イースの投げた箱をキャッチ！

同時に、ユユがジョリーをたくみにあやつって登場！ 非録斗^{ひろと}は、箱をジョリーのキャビンに投げこむ。

「さあ、いまよ！」

ANKAの声であたしたちはいつせいに飛び出す。

イースは、短剣をぬいたジンと戦いながらも、ハンマーや戦闘斧^{せんとうふ}で襲^{おそ}おうとするアンジェらとメアリーをたくみにかわす。

ジャジュがイヴィラとエピタフィラに押しまくられてあぶない。

迦楼羅^{かるら}とエチカと非録斗^{ひろと}が重装騎兵^{じゅうそうきへい}にかこまれていた。

エリコ、ミーシャ、あたし、ANKAの順に飛び乗る。非録斗^{ひろと}が

たおれた。あつ！ あたしおもわず、「ムジョー」

非録斗^{ひろと}の上におおいかぶさろうとする重装騎兵^{じゅうそうきへい}がそのまま砂塵^{さじん}

のように消えた。どうせ、こいつら、自由意志設定のアバターだ。

非録斗^{ひろと}に命には代えられない。

ユユが弓^{ゆみ}で重装騎兵^{じゅうそうきへい}をつぎつぎ射る。弓矢^{ゆみや}うまかったんだ？

迦楼羅^{かるら}、エチカ、非録斗^{ひろと}が解放される。

「さあ、はやく！ 乗ってよ」

ANKAがそうさげんだ。

「よし、撤収^{てつしゅう}だ」

そういつて、イースは、ジンのシンガード (shin guards：すねあて) がくだけのほど強く脚をうって彼女をたおす。返す刀で、アンジェらとメアリーをはらい飛ばし、3人を飛び越えて、ジグザグにうごいて鳥龍^{ちようりゅう}の翼^{つばさ}を斬^きる。ジンが憤怒^{ふんぬ}の形相^{ぎようそう}で立ち上がった。

非録斗^{ひろと}がジョリーに飛び乗ってユユの代わりに手綱^{たづな}をにぎる。手

が自由になったユユは、弓^{ゆみ}を自在につかって、つぎつぎと鳥龍^{ちようりゅう}の脚

をねらう。

エチカと迦楼羅^{かるら}がジャジュをたすけ、イヴィラとエピタフィラを押し返し、すきを見て身をひるがえし、3人でジョリーにむかう。

ユユが弓矢をはなつて援護^{えんご}し、イヴィラとエピタフィラが3人を追えないようにする。

「さあ、ジョリーを走り出させなさい、飛ぶのよ」

ANKAがそうさけぶ。

非録斗^{ひろと}が手綱^{たづな}をひくと應龍^{おうりゅう}が咆哮^{ほうこう}し、翼^{つばさ}をひろげる。麒麟^{きりん}も強くいなく。海馬^{かいば}とジョリーがひっぱられて持ち上がった！

「さあ、はやく！」

身のかるい迦楼羅^{かるら}とジャジュが飛び乗り、エチカがぶら下がる。

まにあつたっ！ あ、イースはっ？

イースは、ジンとアンジェラとメアリーとイヴィラとエピタフィラにかこまれている！

迦楼羅^{かるら}とジャジュとユユとエチカが弓矢を射まくった。ANKAがロープを垂らす。

イースが飛びすがり、應龍^{おうりゅう}と麒麟^{きりん}が大きく咆哮^{ほうこう}し、さらに高く上がった。

重装騎兵^{じゅうそうきへい}の矢が飛んだがもうとどかない。

ギリギリセーフ！ ちょーヤバかったー。

「ふう」

イースは、キャビンまではい上がり、ひたいの汗をふく。

「あぶなかったよ。ありがとう」

ジンたちの鳥龍^{ちようりゅう}は、羽を切られているので、翼^{つばさ}をバタバタさせるだけで飛べない。

「これで、しばらくは時間がかせげるな」

みんな肩で息をしている。

應龍^{おうりゅう}と麒麟^{きりん}が速度をおとさないでぐいぐいひっぱる。

そのひっぱりだけで4頭の海馬^{かいば}とジョリーが空をすすんでいる。

14本の太い綱^{つな}がピンとはっていなきや、あたしたちは、墜落^{つらいらく}しちや

う。

しばらくはだれもしやべらなかったが、イースが、

「あれを」

あたしたちは、はからずもハン・グアリスの平原^{へいげん}を見下ろす場所に出ていた。レオン・ドラゴの王アルハンドロⅢ世の領内^{りょうない}に、あたしたちは、入ったのだ。

「ああっ」

「ひどい。信じらんないよ」

「こんなことって……」

なん万人もの人が、着^きの身着^{みき}のままで、なにもない平原^{へいげん}に吹きさらされている。手荷物^{てにもつ}1つさえ持ってない。なにも持ち出すようもなく、そのまま逃げて来たことがわかる。服はよごれ、やぶれ、くたびれきった状態で、とほうにくれ、絶望^{ぜつぼう}の眼で、天を仰^{あお}いでいる。

ほんとに信じらんない光景だった。あたしたちは、上空^{せんかい}を旋回する。

「ひどいわ。ひどすぎる」

「どーしたら、いいのっ。」

なん万人もいるよっ」

さえぎるものもない平原^{へいげん}は風が強く、身を切るように冷たい^{つめ}。うたれるまま、さけられない氷雨^{ひさめ}に震えている^{ふる}。

「だれも、なにもしないのか」

イースが語気^{ごき}を強めた。

「なんで、こんなことがゆるされるのよ」

あたしも、いわずにいられない。

ずっと、だまって、けわしい表情をしていたANKAが決断^{けつだん}したように、口をひらいた。

「いこう。」

いまは、どうにもできない」

「やむをえない。」

つらいが、それ以外の選択肢せんたくしはない」

イスも、そういつてうなずく。

「わかった。さあ、いこう」

迦楼羅かるらがいった。應龍おうりゆうのむきを変える。あたしたちは、暗澹あんたんたる気持ちでふたたび出発した。

暗くなるころ、ブナや櫟かしの木の森にかこまれた草地くさちを滑走かつそうして、うまく着地ちやくちする。かるい衝撃があつて、ちよつと痛かったし、ジョリーにキズがついたけど。

そのあとは、雨のなか、道なき道をひたすらすすんだ。

ともかく、急がずにいられなかった。なにをするかが決まっていなくとも。

あたしは、がんばってディスプレイを見ていたが、交替こうたいの時間になつて、休憩室きゅうけいしつに入ると疲れ切つて、すぐに眠りにおちた。

13 涯はてなき闘い

どこにいくべきか、決まっているわけじゃない。

位置情報いちじょうほうを見ると、いまだレオン・ドラゴの領内りょうないだった。

けど、レオン・ドラゴへはいけない。雇やとつてくれないだろうし、それどころか、拿捕だほされるにちがいない。

アカデミアにもどつて『k O』をかえしても、同じだとおもう。

ぜつたい、信じてもらえないだろう。

管理局かんりきよくをたよつても、できることはなにもない。だつて、中枢ちゅうすうの運営機能うんえいきのうは狂つてし、作者もこまつてるぐらいだし……

がむしやらにすすんだけど、どこにもあてはない。けど、どこかへむかわずにはいられない。

とまれば追いつかれるし。

眼をさましても、まだ夜中だった。疲れはとれていなかったけれど、コックピットで話しあう声がしたので、あたしもそこへ出る。

ANKAは、あたしのアクセス権をつかつて履歴ログをしらべ、文書

館の『k O O』が、どういう経緯^{けいゐ}で、あたしたちのトランク・ケースに入ったかを突きとめていた。

なんてこたあナイ、ネット上のことわすべて現象^{げんしやう}でしかない。

だから、文書館からカットして、あたしたちのトランク・ケースにペーストしただけのこと。カット&ペーストだ。

なんの答にもなンない。

けど、やっぱそうかっておもったのは、ウイルスがこんなことするはずない、だれかがIEをイジっている、ってことだ。それだけは、あたしにも、はつきりとわかった。

A N K Aが、

「作者でなければ、なかまの運営者よ。あるいは、このていどなら、システムに侵入^{しんにゆう}できるハッカーという可能性もある」

しかし、その言葉に、イースは、

「そうとはかぎらない。運営者を脅迫^{きようはく}か、買収^{ばいしゆう}かすることができるやつということもありうる」

エリコが不満げに、

「ウイルスとつながってるって考えるなら、やっぱ、ハッカーよね。」

そうだとすると、ますますはんいひろくなってお手上げだけど」

でも、あたしは、

「でも、あたしたちを見はれるのは、ハッカーじゃないんでしょ？」

「そこよね。ほんとこんがらがってくる！ ウイルスと聖典盗難^{せいいてんとうなん}はべつのことなのかなー」

「でもさー、少なくとも、聖典のほうは、あたしたちを知ってるやつだよ。だって、ピンポイントじゃん。限定^{げんてい}されない？」

A N K Aが首をふり、

「いや。こつちが知らなくとも、むこうが知ってるばあいがあるし、わたしたちを知らなくとも、ぐうぜん、えらんだのかもしれないし」
エリコがなかばキレぎみに、

「じゃ、なんもわかんないンじゃーん。五里霧中^{ごりむちゆう}ってわけえ？」

降りしきる雨のなか、黒い森をどこまでもすすんだ。

太い樹木じゅもくをよけながら、もの凄いスピードで。よぎる樹影じゅえいが眼に止まらないくらいだった。

「少し應龍おうりゆうや麒麟きりん、海馬かいばを休憩きゅうけいさせよう。

もう、3、4千キロくらい走っているよ」

イスがいった。

ANKAもやむなくうなずき、

「わかった。

でも、もう少し走ろう。休むのは夜があけてからだ。

ま夜なかの深淵しんえんで立ち止まるべきではない。亡者もうじゃの声が地獄じじくからわき上がって、とり憑つかれてしまいそうだ」

病んでるなー。だいじよぶかなー、ANKA？

なあーんて、ぼーんやりおもったりしてる…

え？

なにか声でした。

声というより吠ほえ声だ。

あうわああああうううん、ぐわああううわん。きみのわるい、長くのびた断末魔だんまつまのような咆哮ほうこう。

「なんなのっ！」

あたし、さけんじやった。

「わかんねーよー、いきなし出て来たんだおー」

監視用ディスプレイのまえてエリコがほほをふくらませて息まく。

…ハア、またまた、こいつの見おとし？ もり上げてくれるよな、いつも。

「人狼じんろうのようだね」

イスが平静へいせいにいう。ANKAは、もう少し深刻しんこくだった。

「1匹むじゃない。群むれているね」

あたし、不安。

「逃げきれるかな？」

「だいじょうぶだよ」

そのときキャビンに入って来た非録斗ひろとが微笑ほほえむ。もー、ステキい！

ずぶぬれの迦楼羅もキャビンに入って来た。

「ジャジュが手綱をにぎってる。だいじょうぶさ」

「なんのなのー」

ミーシヤも起きて来る。

あたし、教えて上げる、

「じんろ」

「ジンロー？」

エリコがあたしたちをにらみ、

「は？ 発音しっかりしてよ。人狼でしょ？ 凶暴な森の殺し屋、
環境的生物……きゃあーっ！」「いやーあっ」「わっ」「あぶない」

とつぜん、ジョリーが大きくゆれた。4人ともたおれた。

「体あたりされたようだな」

イスと迦楼羅は、まったくバランスをくずさない。

彼女は、剣をぬき、雨のデッキに出る。

「どーすんのよ、やばいじゃん、たくさんいるの？」

「わめくな、エリコ！」

窓の外をのぞいた。よく見えないけど、うごきを感じる。なにか
がたくさん走っている。光っている眼がときどき見える。迦楼羅が
ふたたびデッキに出ると、ビュッ！ ビュッ！ ユユとともに弓矢
を射る音。

ぶうん！ ぶうん！ というのは、エチカが弩を発射するにぶい
音。

ガラスがわれそうなくらいはげしく音を立てて、ジョリーがゆれ
る。また人狼の体あたりだ！

窓ガラスに牙をむき出し、眼をひんむいた顔がはりつくのが一瞬、
見える。怖いよーっ！

「じゃ、僕もいつてくる。きみたちは、ここにいて」

非録斗も剣をぬき、大きな楯を持ってキャビンの外へ。手綱をに
ぎるジャジュを防御する役をするためだ。

人狼がデッキに上がろうとしてなんども飛び上ってくる。イス

は、もの凄いスピードで走るジョリーのデッキの上で体勢をくずすことなく、つぎつぎ人狼を斬る。神技だ。

夜明けまえになると、人狼がすうつといなくなった。速度をおとし、非録斗がジャジュと交替して手綱をにぎる。ミーシャは、すでに眠っていた。エリコもうつらうつら……

「どうやら、もういないらしい。

さあ、ちょうど朝が来たし、休憩しよう」

疲れきった顔でキャビンに入るなり、ジャジュがいった。雨はやんでいた。

ジョリーを深い森のなか、木々や岩にかこまれたくぼ地に停める。

あたしたちは、朝日を浴びて休息した。

正午にちかいころ、あたし、眼がさめる。

となりでエリコとミーシャが寝ていた。カーテンをあけると、ANKAもデスクにむかって眠っている。デッキに出た。

ジャジュと迦楼羅がならんで坐り、眠っている。非録斗とエチカは後部にいるにちがいない。

イスだけが目ざめていて、デッキを降りて10メートルくらいのところを歩いている。

あたしは、非録斗のところにいきたくなった。デッキを歩いてうしろへまわる。エチカ、ユユ、非録斗がしゃがんで眠っていた。

しずかな森。あたし、なにげにむこうの大きな岩を見た。あれ？
なんだか、岩が少しうごいているような気がした。

ここについたときは、まだうす暗かったから、よく見えなかったけど、いま、見ると、その岩のところどころに、2、3本ずつ太いこげ茶いろの毛が生えている。

岩がふくらむように少し動いて、またもとにもどる。

呼吸みたい。

え？

岩がぬうつと、こつちをふりむいた。

あたし、悲鳴が出そうだったけど、こらえた。つか、悲鳴がち

ちんだ。声も出ないってやつ。

巨大でごつごつして、剛毛の生えた石みたいな皮膚、岩に見えたのも、とうぜんだ。

あたまが小さくて、鼻と耳が大きい。眼はくぼんで・てんみたい。ぱつと見、顔が顔に見えなかった。

怪物が立ち上がる。立ち上がったって、背の高さがほとんど変わらない。

「トロールだ」

いつのまにかイースがそばに来ていた。

「トロールって？」

「ほくおう北欧の妖精ようせいさ」

「妖精——？ 見えないよ」

「妖精ようせいといっても、国によっていろいろあるからね。

そぼう粗暴なやつだから気をつけたほうがいいな。こっちに来るようすはないが」

「だって、さっきふりむいて、こっち見たよ！」

「たぶん、わかってないとおもう。」

さあ、したくをしようか」

そこへエリコがケータイ片手にやって来た。

「ねー、あんたたち、こんなところでんびりしてるばあいじゃないわ。いま世界中で『k O O』があるのは、こことアカデミアぐらいなもんよ。25の都市としは、今日、発覚はっかくした2件でぜんぶ持っていかれただことになるわ。」

いーえ、アカデミアだって、神軍舎しんぐんしゃ（アカデミアを守護する重装機甲騎兵隊やファイアーウォール部隊の住んでいるところ）の時計塔とけいとうに安置されていたのは盗まれたそーよ。のこっているのは、学長がくちょうの所有するものと大司教の所有するものと地下の聖櫃せいひつにあるもので、アカデミアですらあわせて3冊よ……え？……

うきやああつあああああああああ————つつつ！ なっ、なに、あれわっ！」

トロールは、無表情にまたこっちを見た。こんどはじっと見つづけた。

「ばっ、大きな声出すんじゃないよ、エリコってばあ！」

「なにいつてんの、もうこんなちかくに居んのよ、のんきなこといつてないでにげるわよ！」

「もー、気づかれていなかったのにーっ」

「さあ、来るよ。みんなを起こして。出発だ」

そういつて、イースは、馭者席へむかった。

トロールは、大きな棍棒こんぼうを持って、ゆつくりちかづいて来る。

「あっ、来た、来ちゃったよ！」

ふり下ろされた棍棒こんぼうの影があたしたちの上で太陽をさえぎった瞬間、ジョリーがうごき出した。ズォーン！

「ひゃあー」

地面がゆれる。あたし、風圧ふうあつでころんじやった。危機一髪ききいっぱつ！

「うわ、追いかけてくるよ」

エリコがさげぶ。

エチカが来て 弩いしゆみを射放いはなつ。

トロールの肩にあたるが、ぜんぜん、動どうじない。

また棍棒こんぼうが！ スピードが出たジョリー、かろうじてかわす。

イースがANKAといっしょにもどって来た。

「もう、これで追いつけないよ」

ANKAがいう、

「さあ、キャビンにもどって。話したいことがあるから」

あたし、イース、エリコ、ミーシャ、そしてANKA。5人がキャビンのなか、コックピットで円えんをつくるように坐った。ANKAが口をひらき、

「考えたんだ。」

このままでは、わたしたちは、どこにもいけない。いるべき場所がないからだ。身をおちつけられる居場所いばしょがないからだ。

だから国家こっかをつくろうとおもう」

「ええー……っ！」

あたし、さけんじやったんだけど？ エリコだって眼をまるくしてるよ。

「国？ 国って、どうやってつくるのよ？ っか、意味がわかんない」

けど、ミーシャは、

「いく場所が世界のどこにもないから、いく場所をつくるのね。

わたしたち、まちがっていないし、みんないっしょにいられば、そこがわたしたちの居場所よ！」

イスもうなずく、

「ミーシャのいうとおりだ。くわしくきかせてくれ、ANKA」
「いいわ。

場所はどこでもいい。できれば、だれのものでもない土地がいいわ。だれかの土地だったら、ゆずってもらうか、買いとらなければならぬ。

土地を決めたら、国家の主権を主張する。

そうすれば、やたらにわたしたちを襲えないわ。主権を侵害すれば、すじのとあった理由がないかぎり、襲撃して来たほうが変わることになるから」

エリコがいぶかしげな顔で、

「かつてに国つくって、それで主権って主張できるの？

それじゃ、だれにでもできちゃうじゃん。そんなわけないわ」

「むろん、条件はあるよ」

「やっぱねー」

「クドクさ」

あたし、クドクつてきくと、きょうみしんしん、

「どのくらいあればいいの？」

「1人で100以上なら王さまになれる。50以上の人間が5人以上いれば、共同で統治する国家ができる」

イスが口笛を鳴らし、

「いまの状況なら、ユリイカを王とする国家の樹立が可能だ」
エリコ、眼をむき、

「ユリイカが王さまーっ！」

あたしも、びつくり、

「えーっ、あたしがーっ?! 女王じゃないの?」

「そこじゃなくって!

：：まあ、いいわ。ANKAのいうことにも一理あるわね。じゃ、
ユリイカ、あんたには、名ばかりの王になってもらうわ」

「女王だおーっ」

ANKAは、あたしたちを相手にせず、

「べつに王政じゃなくてもいいのよ。政治形態はえらべるわ。」

共和制がいいとか、共産主義国家がいいとか、民主主義がいいと
か」

イスも、

「さあ、では、場所をえらぼう。」

だれの土地でもない、新しい運命の土地をさがそう」

「じつは、もう、候補地があるのよ、わたしのなかではね。それほ
ど、とおくないわ」

またもエリコがしやしゃって、

「でも、ここは、レオン・ドラゴがちかいよー」

「なんでダメなのよ?」

侮蔑の表情でエリコがあたしを見て、

「わかんないの? ジンがちかくにいるってことじゃん!」

「そっかー。彼女、あのあと、レオン・ドラゴに着いたのかしら」

ANKAが立ち上がり、

「それは確認済み。」

もう、国に入っているわ」

イスも立って、扉にむかい、

「では、ちかいうちに軍勢をつれて、ぼくらをさがしまわるな。ま
あ、監視委員の権限を委託されているから、『眼』の追跡はまぬが

れているけれども、しらみつぶしにさがされたら時間の問題だ」

あたし、あせる。

「やばいじゃん……」

「だから国をつくるのよ。そして、闘いぬくしかない。

それしか選択肢せんたくしはない。終わりが見えなくてもね。

さあ、いこうか」

ジョリーは森をぬけて、峡谷きょうくをわたり、山を越えた。むろん、まっすぐ走れる道などいかない。もの凄すごいスピードで木をよけ、岩をよけ、激流げきりゅうを飛び越え、谷を下り、斜面しゃめんを駆け上あがる。たてになったり、よこになったり、回転したりもするし、いままで乗ったどんなジェットコースターよりマズでこわい。

「『k O O』を盗むことにどんな意味があるの？」

あたし、ANKAにきいた。

「『k O O』は、IEのハートよ。真理しんりの精髓せいずいだし、究極きゅうきよくの奥義おうぎだし、IEの精神なの。

それを盗むことの意味は、IE精神せいしんの弱体化じやくたいかだわ。つまり、リアル・ウィルスの仕事がしやすくなるのよ」

「たいへんなことだったのね？」

「国家こっかを樹立じゅりつして、『k O O』をまもる。この聖典せいてんは、もう、どこにも返さないわ。どこも安全ではないから。

国をつくるのは、そういう意味もあるのよ。正義と真実のために国をつくるの」

「……ANKA。あんたって、ほんとと、いろいろ考えてるんだねー。尊敬そんけいするし、うらやましいよ。なんで、そんなあたまがいの？」

「叡智学えいちがくの巨匠きよしやうから、そんなこといわれるなんておもわなかったわ。

あんただって、青龍せいりゅうの称号しょうごうを持つマスターなのよ」

「それ、まだで実感ないんだけどー」

「じっさい、ムジョーのつかい手じゃん（笑）」

「そーなんだけど……」

でもさー、ほんとに、だれなんだろう、盗みやってるのは？」

「だれかがやってるんだよね。」

システムを狂わせているのはウイルスだけど、盗難とうなんは人間のしわざよね」

あたし、

「狂ったプログラムが、つてのは、やっぱ、考えられないの？」

「そうね。ウイルスにやられて聖典を盗む、つて。とくに、わたしたちのトランクに移動させる、なんて考えにくいでしょ？」

ログも見ても、だれがやったかまでは解明できない。少なくとも、わたしにはできなかったよ」

「そっかー。だれかがやってるんだよね。」

でもさー。なんでだろうー」

「いつかナゾも解とけるさ。」

いまは、できることをがんばろう」

大きな谷 (Valley) バレーに出た。

ANKAがえらんだ場所は、どう考えてもふさわしくない場所だった。

「なんで、ここなの？」

そういうエリコと、あたしも同じ気持ちだった。数少ない意見の一致だ。別荘にでもするならいいかもしれないけど。平和的すぎるっていうか、無防備むぼうびにおもえた。

そこは、日本人的には、谷というよりは川をはさんだ盆地ぼんち、山にかこまれた平野へいやって感じの場所。

小さな小さな丘がある。

じっさいは、丘ではなくて、青草の生えた大きな石、磐いわ、つていうものだった。だいたい直径が30メートルに足りないくらい。草におおわれて見えないが、さぐると、石のいろは黒だった。

頂点に亀裂きれつがあつて、一本の木が根をはっていた。亀裂きれつから泉いずみがわいているからだ。

木はその水を糧かてにして育っていた。

なん千年もまえに種たねがここにおとされた（という設定な）のか。

ビーチパラソルみたいで雨が降っても屋根になって、ここにいればぬれなさそう。

根元に洞があり、泉はその洞のなかにあった。

ジョリーを洞のまえに停めた。

洞は南をむいている。

老樹の北に、2頭の海馬を配した。

そして、東に1頭、西に1頭、海馬を。

南に2頭の麒麟を坐らせる。ジョリーのまえに。

こうして四方をかこみ、国家の城壁とした。

應龍は木の上で休む。

城壁の内がわに絨緞をひいた。木の葉が屋根のようにしげっているので、雨にぬれるしんぱいはない。

なんとなく公園で幼児がやる砂場のお城づくりっぽかった。

南が出入り口で、出入りのときは麒麟に動いてもらう。だから、

あたしたちは、麒麟門とよんだ。

ジョリーが宮殿だ。

洞は宮殿の奥になる、聖なる場所として、『kOO』を安置した。

「さあ、国家登録しましょう」

ANKAは、あたしのケータイから登録する。そのさい、正式に

『kOO』を保管していることを宣言した。きちんと理由をそえて。

返信が来る。受諾された。

あたしのクドク・ポイントは権限の委託を受けたのせいもあって、

QDQ:1066 になっていた。もう、完全に実感ない。

ともかく、手つづきは終った。

「国家って、こんな小さくていいの？ ゆっくり歩いても、1分

からないで外壁をまわれるよ」

「大きさは関係ない。

住む人々がしあわせのためのルールをまもらなければならぬ集団、そのしあわせが外の人におびやかされない場所、それが国家だ。

国が大きくなるのは、だれのものでもないひろい場所があったか、

クドク・ポイントで買ったか、わるい王さまの国をほろぼしてじぶんの国に吸収したか、だいたい、そのどれかだ」

「神聖シルヴィエ帝国とかゆーのも、そうなの？」

「ああ。」

あれは。たぶん、リアル・ウィルスのせいだよ。ほんとうならば、あんなに繁栄できるはずはないんだ。

帝国は科学的な武力にすぐれ、武力でまさっているからつぎつぎ国をほろぼし、ほろぼした国を吸収して、大帝国になったんだ」

「やっぱ、そういうことなんだ……」

一連の事件にシルヴィエがからんでる可能性はある？」

ANKAがあたしを見た。

「その可能性はあるかもしれない。ウィルスの恩恵にいちばんあやかっている国だ」

「シルヴィエに『kOO』はあったの？」

「あるわけではないじゃん」

「じゃ、もし、シルヴィエに『kOO』があれば、無敵になっちゃうのね」

ANKAは、急にだまると、彼女の小書斎に入ってしまった。

あたしたちは、せまい国をてきとうにくぎってじぶんの領土にした。

「わたし、公爵エリコね。ここは、先祖代々の所領」

「あー、あたし、ミーシャ伯爵！」

あたし、ただゴロンとよこになった。

ジョリーって、ゆれの少ない乗り物だったけど、さいきん、猛スピードで走ることが多かったし、ゆられないわけではなかったし、こうしてひさびさに地面にしゃがんでくつろぐと、なんかほっとした。

「らくだわー」

なんとなくおもちやの家か、箱庭っぽい。

イースは、ちかくの石や木材をひろってきて足場をつくり、海馬

や麒麟きりんの背なか越しこに外が見られるようにした。海馬かいばのまわりは液体たいになるので、木の板いたを泛うかべるようにしいて、その上に足場あしばをのせていた。

「まわりのようすが見えるようにつくったんだ。

さあ、迦楼羅かるら、木の上に物見台ものみだいをつくりたいから、手つだつてくれないか」

イースと迦楼羅かるらは、森から木を集めて物見台ものみだいをつくり、はしごをかける。

周辺しゅうへんの川や森や丘陵地帯きゅうりやうちたいが見わたせた。

物見台ものみだいの、さらにその上では、應龍おうりゅうが休んでいる。

風がこちよい。あたし、おもわず、

「のどかな風景ふうけいだね。

こんなところで見はりなんて、ほんとにひつようなのかなー」

エリコがタブレット型のタッチパネルを手に憂鬱ゆううつな表情で、

「あんたたち、のんきなこといつてるわね。

ねー、この記事きじ、見なよ。

ジンは、レオン・ドラゴに着ついて早々そうそう、人をふるえ上がらせるような武名ぶめいをとどろかせたらしいわ」

記事きじの内容ないようは、南部地方なんぶちほうの農民のうみんの暴動ぼうどうをおさえて、ジンが武勲ぶくんを上げたというものだった。

しかし、エリコが語る、

「ただ、ほかの掲示板とか読むと、農村のうそんの13歳の娘むすめが暴行ぼうこうされて殺され、容疑者ようぎしやの若者わかもの2人が逮捕たいほされたけれど、逮捕たいほされた加害者かがいしやのうち1人が警察署長の息子むすこだったとかで、即日釈放そくじつしやくほうされ、村人むらびとが大反発だいはんぱつしたってことらしい。

それで、数日ばうどうつづく暴動ぼうどうになったのよ。

そんな事情じじようをあえて無視むしして、ジンは、強引ぐんがりよくに軍武力ぐんりきりよくをもって、抗議こうぎするの農民のうみんたちを激烈げきれつに弾圧だんあつしたらしい。

そうとう残酷ざんこくな仕うちをしたらしいよ」

ジンって・・・

「そのうち決着をつけてやるさ」

イスが暗くつぶやいた。

翌日、ちかくに館を持つ男爵が3人の騎士をつれ、葦毛のりっぱな馬に乗ってあらわれた。

「余は、マックンロー・ドルトン男爵である」

大きなうす茶の口髭をたらし、セイウチっぽかった。

「この谷にながれる川、エジンバールは」

彼は、情感をこめ、芝居がかった口調で言葉を区切った。

「北大陸を南下して大河ローマンの激流とぶつかり、裂大陸間海洋へとながれこむ。

おお、偉大なる、母なる海へ。

しかるに」

エリコが麒麟門から出ていった。

「で？

なんなのよ、要件をいつてくれない？ 詩の朗読には、あいにく

きよーみがないんだけど？」

男爵の表情が陰悪になる。

「すなわち、この谷は、余が塩やオリーブオイルを荷揚げし、羊の毛をつみこむための、だいたいな交易のかなめ」

ただの小さな舟着き場じゃん（笑）。

「されば、まもなく申請してこの谷一帯を、余の領地としようとしていたところ、どこからともなくあらわれないやしき者たちが余にことわりもなく、余の領地となるべき土地を略奪、あさましき欲望で谷の一部を不法にも占拠し、国家を名乗るしまつ」

「ようは、あんたがグータラしてて、手つづきがおそかっただけじゃん。さかうらみだよ。

だいたい、あのへっぽこ栈橋を、まるでものすごい貿易港みたいにいわないでくれる？

そもそも、わたしたちの国はここだけなんだから、なんの支障も影響も、…関係すらないじゃん」

「よって、余は、宣戦布告する」

「かなり後悔するとおもうよ？ いいの？」

「貴族に二言はない」

「負けたほうは賠償金ね。」

いっとくけど、わたし、商学講座出身だから。もし支払いがおく
れたら、延滞利息つけるよ」

翌日、蹄の音をとどろかせ、マックンローが15人の騎士をひきい
てあらわれた。

海馬の背なか越しに、あたしたちは、ながめる。

「きらびやかだねー。鋼鉄の戦士って感じー」

あたしがそういうと、エリコが、

「じつは、意外に貿易でもうかってるのかねー。田舎の舟着き場
みたいだったけど。あなどれないわ(笑)」

「陣形がない。」

とうてい、プロではない」

そういうと、イースは、麒麟門をあけて歩く。

いちど、立ち止まり、騎馬の軍を見すえる。つぎの瞬間、風のよ
うに走り、飛び、騎乗の戦士数十人をたおした。

彼女のまえでは、なみの騎士など、案山子みたいなもんだ。

たいがいは、刃身のひらたい部分でなぐられて、騎馬から落下さ
せられる。起き上がろうとする者は、さらになぐられ、気絶する。

氷の炎となつてかがやく剣に、敵のだれもおそれをなした。

「どうした。立ちむかって来る者はないのか。勇気のある者は、い
ないのか。」

ぼくらの主権をおかす者は、その罪を知れ。

おまえたちは、この」

イースが言葉につまった。ヘンな沈黙が起こったが、彼女が1歩
ふみ出すと、マックンロー軍が恥もわすれ、見栄も捨てて、バラバ
ラになって、脱兎のごとく退却した。

もどって来たイースは、意気揚々どころか、むしろ、元気がない

くらいだ。

「どうしたの？」

「ぼくらの国には、なまえがない。

国のほまれをたたえて名をいおうとおもったら……ないことに気がついたんだ！」

14 新国家の名わ!?

「むろん、考えていなかったわけじゃないわ」

ANKAが不満げにいった。そうだとおもっていたあたしは、

「やっぱ、そうなんだー。知りたーい。たとえば、どんな、なまえ？」

「……いろいろ考えたわ。最終的には」

「なんにしたのー？」

そういつて、ミーシャも会話に加わる。

「まだ決めてないよ」

「どんなの考えたの？」

「いいたくないよ。いいのがおもい泛^うかばないのよ」

3人、考えこむ。

………

エリコが着替^きえて出て来た。

「あんたたちヒマね。わたしは、賠償金^{ばいしょうきん}の請求^{せいきゅう}にいつてくるわ」

そういつて、エリコは、エチカと迦楼羅^{かるら}とジャジュと非録斗^{ひろと}をつれて出ていった。

しばらくして、ケータイが鳴った。

「ユリイカ？ わたし、エリコよ」

「どーした？」

「男爵^{だんしやく}の館^{やかた}へいこうとしてたのよ」

「知ってるよ」

「そしたら、なんと、ハグレーポルガの正規軍^{せいぎぐん}がいるじゃないの」

「ハグレーポルガ？」

「そうだよ、あの男爵^{だんしやく}の領地^{りょうち}は、ハグレーポルガの国の一部なのよ、知んなかったの？」

んで、もって、ハグレーポルガは小さな国だから、ヴオゼヘルゴの属国^{ぞっこく}なのよ」

「ゾッコク？」

「ほかの国に支配^{しはい}されちゃって、まあ、ご主人さまと召使^{めしつかい}、みたいな関係になっている国のことよ」

「へー」

「まじ、信じらんない、大嘘^{おおうそ}つきなんだよー。

賠償金^{ばいしょうきん}がおしくなったんだわ。どケチよね。

っーか、ま、いま、そーゆー感じなの。館^{やかた}にむかおうとしたら」

「そーかー。館^{やかた}にいくとちゅうで、こっちにむかって来るハグレーポルガ軍に出会っちゃったってわけね。

それにしてもはやいわね。まるで、さいしょから軍^{たいき}が待機^{たいき}していたみたいな感じで……

エリコ、いま、どのへんなの？」

「川をわたって、森に入って、一つめの丘に立ったら、見えたのよ。

たぶん、3キロメートルくらい離^{はな}れてるわね。見た感じは、歩兵^{ほへい}200、騎兵^{きへい}30くらいね。

わたしたちは、急^{たいきやく}いで退却^{たいきやく}するわ」

「帰って来るとき、男の子たちに、橋^{はし}をこわすようにいつて」

「いわれなくても、わかってるよ」

電話^{でんわ}をきると、ANKAが、

「さあ、準備^{じゆんび}しようか」

「どうするの？」

イスが物見台^{ものみだい}から降りて来た。

「ぼくが應龍^{おうりゅう}に乗^のっていく。麒麟^{きりん}をつれていこう。そうすれば、みんな乗れる」

ANKAが、

「川のむこうに、2つの丘にはさまれたせまい道があったね。おび

き寄せて、殲滅作戦で料理しよう」

「わかった」

あたしには、なんのことかわからなかった。ANKAは、ただ、
「兵学講座卒業だからね」

4頭の海馬に四方をまもらせ、ミーシャだけをおいて、あたしたちは、出発した。

應龍にイースとユユが乗り、1頭の麒麟にANKAとあたしが乗る。

川のこちらがわで、エリコたちを見つけた。だれも乗っていない麒麟にエチカ・迦楼羅・非録斗を乗せ、ジャジュを應龍に乗せた。ジャジュとユユがイースを、さいしよの丘を越えた場所で降ろし、そのあと、エリコを應龍に乗せて、ミーシャの待つ国に送る。

留守番役だ。

ちょうど、そのころ、イースが敵軍の正面に独りで立つ。

「ひきよう者。」

わずかな人数のぼくたちに対するのに、宣戦布告すらせず、こんな大軍をよこすのか！」

男爵配下の騎士がイースを指さし、

「あいつだ、油断するな。いつせいに攻撃しよう」

「問答無用で突撃か！ さあ、来るがいい。よこしまな者どもよ」

すると、たてがみのついた鉄兜の戦士がサーベルを手にし、声を上げる、

「なにをいうか。」

われこそは、ハグレーポルガ軍に名をかがやかせるストイーク少尉である。

きさまらのような、『kOO』を盗んだ賊に、ひきよう者よばわりされるいわれはないわ！

ニュースにも顔が出ておるぞ！

よって、正義の名のもとに、きさまらを成敗する。天誅を受けよ！」

「逆だ。」

ぼくらは悪の手から、聖なる書物をまもっているのだ。おまえたちは、なにも知らない。

「どうやら、なにをいつても、ムダなようだな。いいさ、さあ、来い！」

「そういいながらも、イースは、逃げるように、敵に背をむけて走りだした。」

「おおっ、さすがに大軍に怖れをなして逃げるぞ！」

「それ、追えっ！」

そのあいだに、エチカ・迦楼羅・非録斗を乗せた麒麟が敵軍の背後にある小さな森に着陸する。

イースは、2つの丘にはさまれた道に入った。

せまくて、人が2人ならぶのがやつと、馬なら1頭がやつととおれる道だ。

敵の全軍がイースを追って、そこに入る。

そのとたん、敵の背後にかくれていたエチカ・迦楼羅・非録斗が出て来て、道の入り口をふさぐ。

イースもせまい道の出口で身をひるがえし、出口をふさぐように仁王立ちする。

どんな大軍でも、歩兵2人か、騎兵1騎ずつしか対面できない。数の意味がなくなった。これがANKAの作戦だ。

ハグレーポルガ軍は、イースにつきつき斬られる。まったくまえにすすめない。しかし、うしろにも逃げられない。せまい場所でパニックが起こる。

そんな状況のさなか、追いうちをかけるように、ジャジュのあやつる應龍に乗ったユユが空から火矢をはなつ。パニックはさらにはげしくなる。

「撤退だー。ここから出るんだー」

けど、出口もふさがれているのだ。エチカや迦楼羅や非録斗につきつきとたおされる。

イースは、斬って斬って斬りまくり、敵をじわじわ追いこむ。と

うとう入り口のところで到達してしまった。

立っている敵は、もう1人もいない。

ANKAは、たおれている兵士のなかから、マックンロー・ドルトン男爵とストイーク少尉を見つけると、聞いたです。

「ハグレーポルガ軍の本隊はどこ？

どこかに本隊がいるのよね？

まさかわたしたちをやつつけるためだけにハグレーポルガが軍をこんなにはやくよこすわけがないわよね？

もともと、べつの目的があつて、ハグレーポルガ軍が進軍していたんだとしかおもえないわ！」

そっか。たしかにそうだよ。ANKAなんて、あたまいいの！

さすがに少尉の口はかたかったが、男爵は、もう半泣きで、

「知りません、けれど、ゴルガスト峠のふもとに数千のハグレーポルガ軍がいます。

そのなかには、ヴォル人がまざつていて、ヴォゼヘルゴの将校がいます」

どういうこと？ でも、わかっていないのは、あたしだけみたいだった。

ANKAがいう、

「いこう」

だが、エチカが、

「いや、いったん、国へ帰ろう。エリコやミーシャをのこして長い時間、国をあけるのは、あまりに不用心だ」

イスも同意し、

「エチカの心配はもつともだ。国に帰ろう。

しかし、ふたたび行動するならば、はやいほうがいいかもしれない。

ゴルガストは、ヴォゼヘルゴの国境にある峠で、そのさきはハ
ン・グアリス平原だ。

わるい予感がするよ……」

あたしたちは、もどった。ジョリーを旅の状態にもどして、すぐ

出発する。

ANKAがとうとつにいう、

「クラウドってのは、どう？」

国のなまえよ。だって、こんなに自由で、かたちのない、あるよ
うな、ないような、空気のような存在そんざいなのよ。

クラウドしかないわ」

異論いろんはなかった。

あたしたちは、ゴルガストへむかう。風が強くなる。

「イスがさつき、わるい予感よかんがするって、いったでしょ？」

なんで、やばいの？」

あたしは、デッキに坐って、エリコにきいた。冷たい雨つめが降りは
じめている。あたし、フードを深くかぶった。

「あんた、考えてごらんよ、ハン・グアリスには難民なんみんたちがいるの
よ」

「知ってるよ」

「ボダシェヴィ大統領は、ヴォル人で、ヴァルゴ教正統派きょうせいとうはで、難民なんみん
ちは、邪魔者じゃまものなのよ」

「？」

ANKAがいった、

「いまは、推測すいそくしてもしようがない。いけば、きっとわかる」

峠とうげがちかくなつたあたりで、あたしたちは、ジョリーを街道かいどうから
はずし、山林さんりんを走った。

敵の見はりがあるかもしれないからだ。

「ねー、こんなふうに戦争したりしてると、すぐに、ジンに見つか
っちゃうね」

あたしがそういうと、イスが、

「避けられない運命だからしかたない」

そういった。

雨がさらにひどくなっていく。

あたしたちは、ジョリーを停とめ、キャビンに入って、監視用かんしようディ

スプレーで軍隊の位置を確認した。

軍のようすがくわしくわかったのに、イースは、

「ぼくと迦楼羅でいつてこよう。じっさいに見たほうが、いろいろとよくわかるだろう」

といって、出ていこうとした。ANKAが、

「待って。」

ユリイカのケータイを持っていつて。これならサーバーにアクセスできる。

AR (Augmented Reality 拡張現実。現実の情報にさらに情報を付加提示する技術) がつかえるから、カメラをむければ、位置情報や、その周辺の情報や、映ったものの解析結果が付加されて映像に出てくる。

さらに情報が収集できるわ。
収集能力が数倍になる」

「わかった。ありがとう。」

じゃ、かりるよ、ユリイカ」

そういつて、出ていった。

エリコが電子書籍リーダーを小わきにはさみながら、タブレット型PCで、なにかしらべている。

「見て。」

さいきん、このあたりのあっちこっちで難民が襲撃される事件が多発してるわ」

「あっちこっちって？」

「おもにハン・グアリスよ。ほとんどね。」

けど、それ以外にも少しあるみたい。ま、ハン・グアリスの周辺だけどね」

「やっぱ、ヴォゼヘルゴの兵隊が襲ってるってことかな？」

「ニュースでは、過激なヴァルゴ教徒の民兵がやってる、って書いてあるけどね」

「民兵？」

「政府せいふの正規せいぎの軍隊ぐんたいじゃない、民間人みんかんじんを軍事要員ぐんじよういんとして編成へんせいしたものを民兵みんべいっていうの。」

ただし、ふつうは政府せいふが編成へんせいしたものをいうんだけど、このばあいは、ヴァルゴ教会きょうかいが編成へんせいした軍隊ぐんたいなのよ」

「なんで教会おそが襲おそうの？」

「そらー、じぶんたちの宗教しゆうきようがいちばんだと考えるからさ。」

じぶんたちの民族みんぞくが生きのこるためつてのも、あるとおもうけど」
ANKAがいう、

「けど、事情じじようはいろいろ複雑ふくざつだよ。なにこともそうだけど、一概いちがいにはいえない。」

それに、もしかしたら、民兵じゃないかもしれないわ」

エリコ、うなずく。

イスと迦楼羅かるらが帰って来た。イスがいう、

「4千人くらいだろう。おもったとおりだったよ。」

兵は、たしかにハグレーポルガだ。だが、指揮官しちくわんは、ヴォゼヘルゴの将校しょうこうで、事実上、ボダシェヴィ大統領だいてりようの軍隊ぐんたいだ。

それだけじゃない」

エリコがなにかを期待きたいするように、

「なによ、どうしたの？ もったいぶらないでよ」

迦楼羅かるらがこたえた、

「荷馬車にばしゃにたくさんの軍服ぐんぷくがつまれていたんだ」

あたし、なんでそれが気にかかったのか、理解りかいできず、

「べつにふつうじゃない？」

イスがあたしのほうをむく、

「正規軍せいぎぐんの軍服ぐんぷくならね。しかし、つまれていたのは、ハグレーポルガでも、ヴォゼヘルゴでもない軍服ぐんぷくだった」

エリコが声を上げ、

「それって！」

イスもきびしい表情になり、

「そうだ。おそらく民兵みんべいといわれている者たちの正体しょうたいは彼らだ」

ミーシャが泣きそうな顔で、

「ひどい、じゃ、難民なんみんを虐殺ぎゃくさつしているのは」
迦楼羅かるらもうなずく。

「ハグレーポルガ、いや、ボダシエヴィの指示しじでうごいているヴォ
ゼヘルゴ正規軍だ」

ANKAが憂鬱ゆううつな表情で、

「これからくりが見えてきたね」

あたし、きく、

「どうする？」

エリコがさげすむような眼で、

「ねー、たぶん、からくりはそれだけじゃないよ」

「え？」

「ボダシエヴィが、なぜ短期間たんきかんで強い権力けんりよくを構築こうちくすることができた
とおもうの？」

「そんなに、はやかっただの？ ぜんぜん知らないンけど」

って、あたし。

「イ・エンジェーロ村で、話、いっしょにきいてたじゃん。わすれ
ちゃったのかよ」

「あう」

ANKAも顔をさらにくもらせ、

「エリコの指摘してきはまちがってないね」

エリコ得意げ、

「でしょ？」

いろいろネット上の書きこみとか、情報を集めてみると、ボダシ
エヴィは、帝国とつるんでいるわね」

ぜんぜん、わかんない、あたし、

「帝国って？」

エリコ、イラつきながら、

「北大陸ノルデの覇者はしや、軍事宗教国家ぐんじしゅうきょうこく、超大国ちやうたいこく、シルヴィエに決まっ
てん
じゃん。

ボダシェヴィの政敵をだまらせたり、失墜させたり、暗殺したりしていたのは、シルヴィエの特殊工作員だったらしいのよ」

イスが腕をくみ、

「ふーん、なるほど。」

けつきよく、神聖帝国が世界征服をするための戦略の1つなんだ。

ボダシェヴィは、ある意味、利用されているんだな」

あたし、わかんない……

「難民殺して、シルヴィエになんのトクがあるの？」

イスが考えこみながら、こたえる、

「ボダシェヴィは、帝国の力で政権をとったんだ。帝国にはさからえない。ボダシェヴィが権力を掌握すれば、ヴォゼヘルゴは、シルヴィエの属国状態になる。シルヴィエが難民虐殺に力を貸せば、さらにボダシェヴィは、シルヴィエと離れられなくなる。」

それに、ボダシェヴィの政治は、過激すぎてあやうい。難民虐殺がエスカレートすれば、国際的な非難をあびてボダシェヴィ政権は瓦解する。

そのとき、シルヴィエが混乱の調停者として、軍事介入し、事実上、ヴォゼヘルゴを制圧する、ってストーリーかな」

ANKAは、スマート・ブックをひらきながら、

「『kOO』を盗んでいるのも、帝国シルヴィエの可能性が高い。

だとすれば、ウイルスも、帝国にいるユーザーがしくんだ可能性があるある」

あたし、やっぱわかんない、

「でも、待って、世界のあっちこっちで『kOO』を盗むことができたのは、データをいじったからじゃないの？」

イスがうなずく、

「たしかに、厳重な警戒のなかにある聖典を盗んだのは、データやプログラムをいじることができるユーザーだ。」

シルヴィエにそんな者がいるとは考えにくい。というより、プログラムをいじれるユーザーなんてありえるのか」

エリコも考えこみ、

「うーん、そうだね。それにさ、データいじったとすれば、なんでアカデミアはぶじなの？」

イースが反論、

「いや、文書館や兵舎はぶじじゃなかった」

そうなんだけど……あたし、

「でも、ウパニシャッド大聖堂は？」

うん、と、イースも同意し、

「そうだった。なぜだろうね。あそこには、さらになにかとくべつなくみがあるのかもしれない。」

なにしろ、心臓部のなかの心臓部だ」

ANKA、スマート・ブックを操作しながらも、あごに手をあてて、眉をしかめ、

「いろいろしらべていておもうんだけど……」

やっぱり、ジンのこともふくめて、すべてがシルヴィエの策略陰謀だとすれば、つじつまがあうよ。

戦国時代みたいな殺伐とした世界が好きなジンをとりこむなんて、帝国ならかんたんでしょう。

たとえば、こういうのは、どう？

まず、ウイルスを蔓延させ、プログラムに侵入し、クドク・システムを狂わせる。

そして、なりふりかまわず軍事力で周囲を制しても、マイナス・ポイントにならないようにIEを変える。帝国を強大にする。

その上で、こんどは金や権力で、クドク・ポイントをふやし、特権をえて、セキュリティに干渉できる地位を手に入れ、プログラムをいじり、聖典『kOO』を盗み、リアル・ウイルスのはたらきをさらに強める。

あとは、ログを確認して、わたしたちの居場所をつねに把握し、バリエースに見はらせる。で、ジンにわたしたちの位置情報を教えて、『kOO』を奪わせる。どうかな？」

あたし、なんかしっくりこない。

「少し話に飛躍がくない？」

だいたい、なんで、あたしたちにからむのか、わかんないよ。

それに、いくら特権だったって、プログラムをいじるなんてことができるものかなあ？」

A N K A がブックをとじ、

「たしかに、プログラムをいじれる、つてのは疑問だね。

わたしの説じゃ、なんで、あたしたちにからむかも説明できていないし」

あたし、

「それにさ、そんなことしちゃったら、I E の意味がまったくくないじゃん。

おかしいよ。そうなら、そのユーザーは、ほかのワールドへいけばいいんじゃない？　なんで、ここなの？

あるいは、じぶんでワールドをつくっても、いいんじゃないの？　だってさー、リアル・ウイルスをつくれるくらいの技術があるんだもの！」

A N K A も眉根^{まゆね}を寄せ、

「謎だね。まあ、人は、いろいろだから、一概におかしいとはいえないかもしれないけどね……

そういえば、今日になって、もう1つ気になることがある。いま、ジンのうごきがログでとらえられなくなっているのよ」

イースがへいぜんという、

「なるほどね。

では、そろそろ、ぼくたちがログを見ていることに相手が気づいている可能性があるってことだね。

ともかくも、問題はウイルスだ。ウイルス・プログラムのある場所をさがすが、いちばん現実的で、かつ重要だよ。

それだけさ」